

## 明治大正の歌業

萬葉集、古今集、新古今集、短歌の方面で後世の指標となるものは此の三つの歌集に大體盡きてゐる。その萬葉集は鎌倉期と徳川期の歌人及び學者によつて大部分は世に出てしまつた。古今集もその通りである。新古今集は室町時代の歌人學者、ことには芭蕉一門の人々によつて之れまた大半は滋味を吸ひとられてしまつた。古來の歌の滋味は大部分世に紹介され、或ひは吸ひとられてしまつた。眼を廻らして靜かに歌の傳統を見て來ると、もう歌の上には殘された仕事の部分が極めて少ないことに氣附くであらう。ただし歌の文化史的の開展といふことになる、ここには多くの事業が殘されてゐる。古來の和歌註釋者の事業をさらに文化史の意義に輝やかしてゆくことが、明治大正の歌人學者の事業であるやうに思ふ。

推古朝廷以後、奈良時代の歌謡を支へる主觀とその時代の國民精神——外交、政治、美術、宗教——を支へる主觀との内面關係などは差しあたり爲されなければならない事業である。同

様の關係を古今集新古今集の上に觀て來ることは殊に有益の事業であると思ふ。欲するところを云へば限りがないが、欲するところの十の一をも仕遂げたいと思ふ。

鎌倉の終りから室町時代へかけての歌人の仕事は、徳川期の俳人が大部分その滋味を吸ひとつてゐるが、歌人は殆んど與つてゐない。たとへば正徹、心敬、宗祇、肖柏、守武、宗鑑等の作物及び心境に就ては徳川の歌人は多くの交渉を以てゐない。さう云ふ意味で徳川期の歌人は一種の功利主義又は自然主義に落ちてしまつた。なほ言へば、中世の佛教に基脚した人道的國家主義の和歌は眞淵、宣長、蕉胤のために遠ざけられ、代つて功利的な國家主義の歌、または初期啓蒙的の美術的の景物歌が、興起するに至つたのであるが、ひとりこの間に立つて、芭蕉系統の俳人等が豊富に中世の佛教精神人道精神を擗取して行つたのは、日本文化の進化のために多大の恩恵と思惟せねばならない。之れ等俳人の作を讀んで見ると、歌は自然に俳諧を分化させなければならなかつたことが分かるであらう。丁度蝌蚪がその尾を落としてゆくやうに。

今の歌をよく見ると、その多くはいらぬ部分を澤山附着させてゐる。直觀的に生きたところ



ろを掴んだと思ふ歌が、その直観を腑分けしたり、説明したりしてだいなしなものにしてゐる。堪能の俳人が今の歌を見たら、もどかしくて仕方が無いだらう。歌の新らしい開展がここに無ければならない。所謂「三十一文字皆生命」である。

(大正十一年二月)

## 職業への願ひ

自分の携はつてゐる職業のうちに歌をたづねなければならぬ。それは職業に心をかたむけて、そのなかに自分の命を見つげ出すことはたゞちに歌の心だからである。よき人はすべて自分の仕事を歌の心で辿つてゐるに相違ない。職業に願ひをこめる心は職業を輝やかすとともに、自分の心をも輝やかして来るであらう。たとへば店に携はつてゐるならば朝早く起きて自分の店の粧ひをする。斯うしたならば、来る人の心をよろこばせるだらう。ここを斯う清潔にして、ここを斯う片付けて、あれを早くあの家にとどけて、この勘定を早く済ましてと思ひはかる心は、すでに懇ろな藝術の心である。商賣は世の便利をはかつてやる仕事である。人の心をそつちのけにして利益のみを中心とする時に、そこから歌の心は抜けてしまふ。商業の人などは一番心の危ふいところに居るのであるが、それでも心がけ一つで、そのなかに一途の願ひをかけることの出来るものである。他の仕事——ことに農業だの教師だの、僧籍の人だのならば、



その職業への願ひはただちに歌の願ひである。吾等の道は職業と一枚になつて毫も傷けられるものではない、もし職業への念願と、歌への念願とが分れ分れになるやうであるならば、どちらかがまだ不純であるのである。吾等はそれを清めなくてはならぬ。する仕事が歌の思ひになつて一途に傾いてゐるならば、表現などは一日のわづかな暇を割けば足りる。表現も大事であるが、これとても願ひを持つ事の上の苦心でなければならぬ。心が願ひに満ちて來れば、言葉は自然に形を取る。

百姓が朝起きて太陽を拜する、さうしてけふ一日の太陽の恵みと田畑の物の幸を祈る。夜る寝るときに枕に伏して今日一日の勞作の跡をかへり見る。この行事の形式は全く歌である。計り知ることの出来ない自然の心にかけてする人間の願ひの覺束なさ——この覺束なさのゆゑに吾々は大悲の恩をあふぐことが出来るのである。

徐かに歩まなければ息がきれる。歌に心がけて三年目ぐらゐの人が最も息を切らす。それは歌に追はれるからだ。追はれると云ふのは、歌に目が明いて來たからである。その目がもう一度見えなくなるところを眼がけなければならぬ。

(大正十一年六月)

## 思想の事、流行の事

私等の歌は、或る思想または主義といふやうなものを先きに立て、作るのではないのです。さう見るのは見る人の眼がまだ明いてゐないからです。しかし私等を見るものを手當り次第に歌つて行くやうな事はしたくないと思つてゐます。その點がある人には氣に入らないかも知れません。これはお互の眼の明き方の相違です。よく人たちは何かと云へば歌は感じたまゝでよいと云ふ。それはそれに相違ないのです。しかし眼が覺めた後の感じのまゝと、覺めない前の感じのまゝとは、同じでは無い。眼がさめたものゝ感じ方、また眼を覺まさうとするものゝ感じ方がさう云ふことを念としないものゝ感じ方と違ふからと云つて、それを思想と云ひ、主義を先きに立てるのだと云ふならば、その批難は喜んで受けるより外はない。私等から云へばそれは藝術の願ひに生きてゐるほどの者の當り前のことであつて、さう云ふ意味の思想なり主義なりが無いならばそれは恥づべきことだと思つてゐる。さうしてそれは思想や主義を先きに立



て、ゆくの中でも何でも無い當り前のことです。さう云ふ心になつた人の作物は自然にさう云ふ風——主義や思想を先きに立て、行くやうに見えるのです。作物にさう云ふ色合の差の出で来るのは致し方の無いことです。

なほこゝで云つて置きますが、自由と云ひ個性と云ふ事は、この眼のさめた上で、露はれて来るのが本當の自由なり個性なりであらうと思ふので、眼のさめない前には自由や個性などは無いのです。今の多くの新しい人々は眼の覺めない状態の自由や個性を奨励し宣傳してゐるやうですが、困つた事と思ひます。それは却て非自由非個性の宣傳になつてしまひます。私等はなかなか眼が覺めるなど云ふところへはまだ行かない、たゞ眼を覺まさうと努めてゐるので、誤解されないことを願ひます。

愚にくらくいばらを掴む螢かな

芭蕉

吾等の歌は深い意味を以ていつまでも人の心の奥に保たれるやうに、さうしてより深く人の心を吸ひ込んでゆくやうに、今年の味ひは、來年の味ひと異つた深味を以て味はれるやうに、

掬べば掬ぶほどその歌が、新しい泉となるやうに、さうあり度い。通俗の意味の流行といふことは忌むべきことである。流行は深いものを淺くし、飽くべからざるものを、飽かしめてしまふことである。藝術の或る體が世の流行の騒々しさに拐びきこまれたが最後、それは嘔みしめもしないで、やがて吐き出されるのである。流行と云ふことは怖るべきことである。之れは歌などよりも他の藝術の體のうへに、殊に此の數年來、吾等が見て來た痛ましい事柄として感ずることである。作者は流行をつくるので無いが、作者の態度のうちに、どこかにさういふものゝ動因となる何物かがあるのである。それが人々に觸れてゆく、賢明なる作者はその流行のうちから自身を救ひあげるのであるが、心の弱さはつい知らず識らずその中へ拐き入れられる。さうして人の心を飽かしめて了ふ。流行となるほどの勢が無くてはならないが、吾等はその危ふい幾微に立つて靜かに自身を保つ程の心掛けが無くてはならない。

(大正十一年十一月)



## 罵るものへ

吾等の「潮音」の歌が近頃殊に眼ざはりになると見えて、今年は春頃から今日迄方々の雑誌で長々しい批評を書いてゐる。それが凡てあたまから悪罵をしようとする態度で物を云つてゐるやうである。そのやうに端から端まで悪口を謂はなければならぬ歌ならば、極めて價値の無いものに相違無い。價値の無い物ならば、問題にしない方がよいではないか、肩をあげて強がりと言ひ、苦勞してひやかしを言つてゐるところを見ると、「潮音」の歌がだんだん彼れ等の眼ざわりになつて來たと思はれても仕方あるまい。ただ併し彼れ等は注意するがよい。さう云ふさびしい心でする批評は、却つてその敵をして愈々その大を加へしめる者であると云ふことを。見るべし。此の半年がほどに彼れ等の歌が期せずしてその風體を、その否定する者の方向へ向けつつあることを。「さ庭べ」の「霧ぬち」に「夕まけて」「あよみ居り」などと云ふ言葉にすがりついて悪寫生をしてゐる歌に、彼れ等がいつまで終始する事が出来るか、「潮音」を否定す

るものの聲が、今の歌壇の悪寫生の群れから來ることは吾等の豫期して當然としたところである。さらにさらに彼れ等は自らの愚を自曝して來なければならぬ。今潮音の某同人が録してゐる歌界推移録は何れ世に現はれることになるであらう。それ等を見たならば、似非萬葉調から早變りをしつつある歌人の情形が手に取るやうに見ゆるであらう。

改めて「潮音」の同人と社友とに告げます。吾等の道は、すでにその緒を開いて、今や四半程を行きつつあります。その事が分つてゐる人は、もう胸は一ぱいになつてゐる筈です。心を深くし飽までも脚元をふみしめて行かなければならぬ。かの擾々たるものの聲に氣を取られないうやうに、ただ古人の心にこたへ、來るべき世の準備をするつもりで行かなければならぬ。寂しい、怖しいほど寂しい。此の寂しさがある故に潮音の道がある。もしその邊りの途中でひよつとして飄輕ものの良にでも掛つたら、もう最後である。吾等の槌は空の空を撃つ槌である。「空の空を撃つ」此の意味を常に考へなくてはならない。くたびれを感じるものは、その用意をしなければならぬ。



謙遜と卑屈の異るごとく、驕慢と自信とも異なるものである。吾等は驕慢なるものの落ち來り、落ち行く末をまさまさと今眼の前に見る。吾等は驕慢を戒めなければならぬ。驕慢なるものが、一度び心の空虚を感じる時、彼れらは得て破れかぶれの悪罵などをして、其心の空しさを充たさんとするものである。驕慢と自棄とはとなり合せであるからである。すべて自信の無いものすることである。(大正十一年八月)

## 俳諧問答

問。俳諧とは如何なるものなるか。

答。俳言諧語の藝なり。

問。滑稽の意なるか。

答。その事を答ふる前に次の事を述ぶる必要あり。中古の勅撰集に俳諧歌といふあり。古今集雑の部中に、初めて俳諧歌の名目を設け、うちに五十五首の俳諧歌を載せたり。

梅の花見にこそ來つれ鶯のひとくひとくと厭ひ  
しもをる。

いくばくの田を作ればか郭公しでの田をさをあ  
さなあさな呼ぶ

問。萬葉集には俳諧歌と稱すべきものなきか。

俳諧問答



答。名目は見當らず。第十六卷に「無心所着」の歌といふもの二首あり。芭蕉も「無心所着」といふことを謂ひたれど、萬葉集のそれとは異れり。萬葉の無心所着は、契沖が雜會歌と註解したるにても知らるる如く、一首に雜意無きものの意味なり。俳諧歌とは異れり。

問。古今集載する處の俳諧歌とは如何なる者なるか。

答。北村季吟は俳諧歌を註釋して「され歌の如きものにて、利口したるやうの事なり」と云ひ、また「荒れたる言葉を云ふと思へり」とあり。さらに古今集の俳諧歌を評して「されど此の集の俳諧はさらに然らず、ただ思ひ寄らぬ風情をよめるを俳諧といふなり」とあり。され歌は戲歌滑稽歌とも譯すべく、荒れたるやうの言葉は、雅ならざる言語にして、俗言とも譯すべく、思ひ寄らぬ風情とは、歌の格を逸したる風情とも解すべし。

問。俳諧の義には「滑稽」、「俗言」、「破格の想意」を含めりと解して差支なきか。

答。差支なしと思ふ。少くも宗因までの俳諧はしか解して差支なし。

問。萬葉集第十六に載せられたる「寺々の女餓鬼まをさく……」の歌、また「池田の朝臣が鼻の上を掘れ……」などの歌、その他同集にはこの類の戲歌多し、之れ等は俳諧歌といふべきか。

答。俳諧歌である。

問。萬葉集の歌は、その當時の俗言を以て作られたりと云ふ。然らば萬葉全部の歌も俳諧歌なるにあらざるか。

答。萬葉の當時には、未だ言語は雅俗の二途に分れず。此の區別を生じたるは平安朝以後と想はる。従つて平安朝以後は、歌にも正雅の體と俚俗の體を生じたるなり。この俗言の體が古今集の俳諧體なり。萬葉集は雅俗未だ別れざる時代の歌なり。従つて後世の所謂俳諧體に類する歌を多く混入せり。「寺々の餓鬼」「池田の朝臣」の如きそのもつとも甚しきものなり。問。後世の俳諧（宗鑑、守武等のもの）は、古今集の俳諧歌の進化したるものと見るを得べきか。

答。見るを得べし。ただし、ここに注意すべきは、俳諧はすなはち俳諧連句なることなり。古今集の俳諧歌は連句にあらず。俳諧の起源を單に俳諧歌なりとするは他の半面を知らざる者の見なり。

問。他の半面とは何なるか。



答。すなはち連歌なり。連歌の起源は遠く紀記の片歌の唱和にあり。萬葉集にも連歌のことあり。平安朝に至りて、金葉集、雜の部に三十餘家の連歌（上下二句だけのかけ合）あり。おほむね俗言にして滑稽、想意もまた歌格を逸したるもの、言ひ得べくば之れ俳諧の連歌なり。

問。古今集の「俳諧歌」と、金葉集の「俳諧連歌」との間に進化上の脈絡は無きか。

答。俳諧歌が俳諧連歌にまで進化したりと見るべし。金葉集に於ては上下二句だけのかけ合連歌なりしが、鎌倉より南北朝時代を経て、二條家の良基卿が連歌に關與するに及び全く「和歌様連歌」となり、さらに上下二句の掛合に止まらず、數十句より百句、千句を數人乃至十數人にて聯詠するに至り、連歌の内容はここに一變し、さらに宗祇法師の出づるに及んで内容に深化を與へ、殆んど當時の和歌を壓倒するの勢ひとなれり。

問。良基、宗祇等は俳諧體の連歌を和歌様のものにしたるにか。

答。然り、二條良基は和歌の家に生まれたる人なるがために此の結果を來したり。俚俗的に進み來りたる俳諧は、また爰に於て、和歌の雅言式なるものなかに押し込められたるなり。

問。此の反動は當然來るべきにあらざるか。

答。反動は來れり。山崎宗鑑、荒木田守武等の新風之れなり。宗鑑守武等は俳諧體連歌が和歌様連歌に變化したるに嫌らず、極めて卑俗なる言葉を以て滑稽なる想意を行ひ、ここに新なる連歌を興せり。之れ後世の俳諧（連句）の濫觴なり。古今集の俳諧歌に似て、俳諧歌にあらず。金葉集の連歌に似て連歌にあらず。紀記の片歌の如くにも見え、萬葉の池田の朝臣の鼻……の如きにも見ゆれど、また大に異れり。

問。藝術としての價值はありや。

答。價值乏し。

問。如何なるところが利點なるか。

答。和歌の雅びに囚はれたる連歌を、再び俚俗卑近の世界に解放したるところを利とすべし。

問。後の芭蕉の正風に寄與したるところは無きか。

答。芭蕉をして俚俗卑近の天地に眼を着けしめたるころは、正しく宗鑑、守武の賜物といふべし。

（大正十一年十二月）



問。宗因は如何。

答。宗因は宗鑑、守武、貞徳の後にいでて滑稽以外に洒落の一天地を開きたる功德者にして、所謂檀林派の開祖なり。

問。芭蕉との関係は如何なりしか。

答。芭蕉の前半世は殆んど貞徳乃至宗因等の埒内の人なりき。年三十八。飄然詩の何物なるかを解するや、蕩地邁進、自然の心（造化の心）に逼れり。正風の體ここに興れり。

問。芭蕉のその當時、解したる詩とは如何なるものなるか。

答。「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」

「芭蕉野分して鹽に雨をきく夜かな」

枯枝の鴉、鹽の雨など從來の和歌に囚はれざる着眼を見るを要す。之れ二條冷泉などの歌には全然の法度なりしものなり。

問。その事ならば、宗鑑、守武、宗因等もすでに試みたる所ならずや。

答。勿論題材としては用ひたり。たゞ風雅（詩）ならざりしを惜しむ。言ひ換ふれば雅たされた

る俗言ならざりしなり。

問。芭蕉の俳諧史上の位置は如何。

答。宗鑑、守武等の滑稽を擺脫し、宗因の惡洒落を刷新し、然かも之れ等先人の遺地を離れず、飽くまでも俚俗鄙卑の境に詩を求めたる所——求めて而して其の俳諧を純粹の詩の域に進めたる所、芭蕉は實に俳諧に依つて、生命の大道を極めたる人なり。

問。芭蕉の和歌史上の位置如何。

答。古今集以後雅俗の二途に別れたる和歌（和歌、俳諧歌）の限界を撤去して、美の標準を新にし、俳諧の形に依つて、和歌の生命を行ひたり。美の標準を新にしたるは、萬葉の卑俗身邊を詩に恢復したるなり、和歌の生命を開きたるは、新古今の哀寂を進めたるなり。芭蕉は和歌道の大成者なり。俳諧の概念には傳統上滑稽戲謔の意あり。而して芭蕉の俳諧は俚言卑辭たりしも、しかも滑稽戲謔の意なし。芭蕉は俳諧の換骨脫胎者なり。芭蕉を呼ぶに傳統の不純なる俳諧人の名を以て呼ぶは當らず。何等か別にふさはしき名前あらまほし。

（大正十一年十二月）



## 甘言と悪語

自分の作に就て、自分の意を満たすやうな批評を受けた場合が大切の場合である。さう云ふ時に、省みてわれを戒しむるほどの心がけがあり度い。反対に自分の作に就て、自分の意を満たさないばかりか自分の辱しめともなるやうな批評を受けた時に、靜かに吾を保つほどの自信があり度い。これほどの心がけが無いならば、その人の藝術の程度もよい加減のものであると云ふより外はなからう。ことごとく人の言葉を信するならば、人の言葉の値ひが無いとも云へよう。今のやうな騒々しい世間に立つて、靜かに自らの道を遂げようと思ふものは、餘程の自信を持つのでなければ心が滿つるか、氣が挫けるかする。師とたのむ人の言葉にもをりをりの過ちが無いとは言へぬ。をりをりの言葉に意をそそいで分らぬところは分らぬと云ひ、疑はしいところは疑はしいと自分を立てて行くだけの勇氣がなければならぬ。師とたのむほどでも無い人の場合はなほさらである。しかしその人が誠から云つてくれた言葉といふものは、何處

にか自分に沁みるあたかかさのあるものである。假令その言葉の筋道はちがつてゐても其の言葉を擔つてゐる心の誠は、自分にとつていつかは自分のいのちとなるであらう。かのあらかじめ争闘の意を挾んで來る批評に對してさへも、心靜かなる修行人はそれを疎そかには見ないであらう。自己を大にするものは味方の甘言である場合よりも、味方でない者の悪語に多いことがある。吾等が今の世に處する唯一の道は如何に吾れ自身の心を保つかにある。此の心がけが無くして今の世情の轉變に立たうとするならば、危ふいことである。(大正十二年二月)



## 芭蕉封鎖

此のごろ聞くことのうちで俗情の最も厭ふべきものは、芭蕉への尊敬の穿きちがへである。芭蕉を尊敬するものは、芭蕉を前にして沈黙を守るべきだと云ふ種類の言葉がそれである。此のたぐひの人は、芭蕉などをつひ此のごろ迄鞭打つてゐた人々である。今もおそらく芭蕉の心持ちや藝術などを分つてはゐないであらう。たゞ世の心さしの深い人々がだんだんに芭蕉に理解をもつて来て、その藝術の把持を芭蕉の心境に置かうとするものゝ多くなるのを見て、自家の塘堤の支へきれなくなつた苦しさに、かやうな俗匠らしい言葉を考へ出したのであらう。芭蕉を逆用して自家の無識の暴露を防がうとするもので、芭蕉冒瀆の最も甚しいものである。

芭蕉が今の世の一部の人々に浅く解されてつまらぬ意味の宣傳に供されてゐることは吾等にも見えてゐる。しかしそれとても此の欺謫なる沈黙者よりは増しである。彼れ等は芭蕉を尊敬する形をして、實は芭蕉を封じようとしてゐるのである。それは何よりも彼等の所作を見れば

分かる。彼れ等が若し眞に芭蕉によつて沈黙を教へられると云ふならば、彼等一切の言動にその事が現はれて來なければならぬ、芭蕉を前にすると沈黙する。芭蕉がゐなくなると喋り出すと云ふのであつてはならない。斯う云ふ沈黙を吾等は稱してにせものと云ふ。彼等もとにせものである。朴訥を粧うて狡黠を行はうとするものである。その心事は醜しとしなければならぬ。

もし孔子歸依の徒がそのやうな尊敬を孔子に送つて沈黙を守つてゐたらば、孔子の教義は今の世に傳はらなかつたであらう。釋尊隨喜の徒が、釋尊を遠ざけて沈黙を守るに終つたらば、かの三千藏經は生まれなかつたであらう。芭蕉の尊貴に於けるも同様である。吾等が現在芭蕉に隨縁して微々たる力を此の仕事の上に致さうとするのは、芭蕉を尊しとするからである。而して吾等の仕事は芭蕉を顯はすものか、瀆すものであるかを判断するにはおのづから人があつて、かの偏心屈情の人の與かり知るところで無い。



常に身邊から眼を離さぬことが大切です。その身邊の事を心の方へ引きよせて生き生きとした輝きのなかに在らしめなければならぬ。身邊に眼が着いて來ると、自然に言葉の縁遠さが氣になつて來ます。さう云ふ場合にはその縁遠い言葉を大膽に振り捨てて行かねばなりません。すなはち感動が漲つて、言葉の屈托を無くしてしまふところまで行く。さう云ふ時には必ず自然の言葉が胸を突いて出て來るものです。さうしてその言葉はきつと身に引き寄せられた生き生きしたものであるに相違ない。

一夜さをささへてゐたる雪の枝おもひあまりて

ハラリと落とす

みなみ風雪も氷もひととときに流してはづむ溪川

の水

などそのよい例です。しかし之れを逆に考へて言葉の新奇をやらうと、その方から這入つて行くやうになると、もう歌の墮落になつてしまひます。その點を警戒して飽くまで感動の力で言

葉を切り開いて行かねばなりません。そこにきつと卑近な世話としての言葉が必要になつて來ます。感動の迫つて來る時、誰れが「さ庭べ」などと云ふ特言葉を言つてゐられませう。新と變化と流行の無いやうな生命は必らず硬固した死生命であることを怖れなければなりません。品位といふやうなことは、感動の誠さへあれば自然に出て來るものです。さう云ふことは考の上には置なかい方がよいと思ひます。潮音は今又一つの山を越えようとしてゐます氣を強くして下さい。(大正十二年三月)



## 寫生と萬葉誤用

潮音五月號の到着のころ、私は吉野を下つて高野か、熊野邊にをることと思ひます。それから大阪を経て——或ひは神戸から、四國へ渡らうと思つてゐます。四國の晩春の野を歩行いて見度いと思つたのは、もう數年來の希望でありました。故人大作の歌に「讃岐のや小野の和草ふみ分けて巡禮のゆく春は來にけり」に催されたところもあります。大作のことを云へば、丸龜在の長尾にも行つて、故人の墓にも詣らうと思ひます。丸龜から伊豫へ出て、今治、松山と經て、それから土佐へ出ようか、或ひは瀬戸内海を通つて、再び大阪へ出て、京都から大津の方へ出ようかと思つてゐます。

諸方から潮音の歌——ことに私の歌を批評する言説が賑やかにきこえて來ます。個人として來る消息は概ね私の歌の心の向ふところを認めてくれるものであるが、雜誌などに見える批評

は又ことごとく否定の者のみであるのが面白い現象だと思つてゐます。その批評の多くは舊來の萬葉語寫生歌の標準を以て私に臨んで來てゐるのですから、之れは當然のことです。萬葉集は能相の我れを打ち出してゐる點に於て、今の萬葉語寫生歌とは根本に於て異つてゐます。その寫生的萬葉歌の人から來る攻撃や批難が賑はへば賑はうほど、私たちの主意とするところが顯はされゆくことになるので、之れはここ半年ばかりはまだまだ盛んにならうと思ひます。私の「短歌立言」一部は首より尾に至るまで寫生歌の弊竇を露はす努力であつたのです。あの立言によつて胸壁の痛さを感じるものは、ここに致命の打撃を感じて反噬して來るのが當然です。しかもその反噬が何等理論の根據を有する無く、ただ揚足取をしてゐるのには驚く外ありません。斯う云ふ薄弱な防戦によつて、寫生歌人の自ら信するところの案外に淺いのに侮蔑の心をさへ抱かされるのです。また中にはその揚足取りの口吻を模倣して私たちに向つて來るものもあります。一犬怖れを鳴いて群犬もまた伴ふといふものでせう。それも無理のない事です。寫生歌の追隨をして來た人人ですから、寫生歌の顛覆はやがて自身の據るところを失ふわけになるのですから。氣の早いのは、もう旗色を私たちにまがへてゐるものもあります。之れ等の點



に就て一々實證といふものを擧げなければ分らぬと言ふならば一々數年來の畸形の寫生歌を擧げて説明してやります。對比して眼に見えるやうにしたらば、初めて驚きの眼を瞠らうと思ひます。さう云ふ感の純い人々であるから、ああ云ふ拘泥の深みへはまつてしまつたと思ふのです。實證論者は寫生論者、寫生論者は凝視論者、而して凝視論者は實に萬葉誤用論者なのです。萬葉集の爲めに——あの朗らかに純一に、しかも直截に、感情の黎明期を歌ひあげた上代諸天のために、斯かる暴虐を行つて、しかも未だ之を覺らざるに至つては之れを何と謂ひませう。私の胸は深い鼓動を打つて來ました。私は旅行から歸つて徐かに私の陣營を進めませう。

以上は私の仕事の消極的方面です。私は萬葉集の誤用を撃つ。しかし私たちは、萬葉集の位置を守らうとするものではないのであります。萬葉集はその時代の表現です。私たちはすでに萬葉の素純を失つてゐます。その素純は如何にもがくとも取りかへすことは出來ぬ。爰に人間の悲哀があります。それではどうすればよいか、爰が私たちの仕事の積極方面になります。この仕事は芭蕉良寛の心のありかに結び附きます。芭蕉良寛はこの心の汚れをどう處置したか。

私はここに歌人の眼が向いて來なければならぬと思ひます。今流行の科學は如何に進歩しても、此の心の汚れを如何ともすることが出來ない。それ故に私は科學に據る方便を抛つてゐます。而して爰に開かれる唯一の道は心法の世界への歸向です。爰に芭蕉良寛の心が垂示の標を立ててくれてゐます。この標を葉にしてゆくと、人々の心は、汚れを——その汚れた儘で透き通るやうにしてくれます。此明るさはもう萬葉時代の明るさでは無い。この邊の消息の委曲は「短歌立言」の後半「愛」の提示以後今日迄本誌の上に明らめつつありますが、なほ限り無く展開されるのです。潮音の今の仕事は、かの消極の事業——寫生歌、萬用誤用歌の野を清めつつ、此の積極の仕事に手をかけてゐます。歌壇はこぞつて予を攻撃するであらう。しなければ彼れ等は浮萍の族に等しいものである。何となれば歌壇は殆んど全部が彼の畸形歌の聲みに倣つて醜態を曝し、同臭相依つて纒かに生命を保つてゐたのであるから、而して私の布説は、すべて彼れ等の醜態を闡明する結果になるのであるから。(大正十二年四月)



## 主観に就て

短歌雑誌に「理解を缺く批評を排す」と題する花田比露思氏の論が巻頭に載せられてある。その中に「潮音」新年號に我が社の同人が「あけび」を論じたのを引き合ひに出してゐる。ここに同人の一人として花田氏の注意を喚んでおかう。「子規の歌は明治三十四年五年に亘つて寫生（客観描寫）の歌から、主観を自由に詠みこなすところに這入つて行つた……此の傾向に就て知る所あらば、假初にも子規よりは一名寫生の歌などとは云へぬ筈である。」とは花田氏の言葉の意味である。花田氏のいふ主観的色彩といふことは、主観を自由に詠みこなすといふことであると思はれる。子規は客観描寫の外に主観をも詠みこなしたと云ふのが氏の論點であらう。主観を詠んであるから主観の作者、客観を詠んであるから寫生の作者といふのは誤つてゐる。主観——身境、心境、心情の或る推移、悲喜哀樂、情操、觀念を客観的に取り扱つてゐたのでは、内外の別あるだけで同じく寫生である。今の歌壇の人々は此の事を考へずに主観客観を

説いてゐるので、論が極めて低いところに居るのは遺憾である。潮音同人の説くところの主観は一切の事實——それは外界の事實でも内面事實でも——を漂はせてゐるところの能相の心を指すのである。所相の心情は、心情の内にてすでに客観の位置に据ゑられたもので、それは外界の事實と等しいものになる。まことの詩は此の能相の心が——所相の側の者を漂はせてゐなければならぬ。

此の漂はせる機會といふものは極めて瞬間的のもので、漂はせてゐると氣がつけば、もう能相の心情は所相の位置に變へられて材料となつて了ふのである。芭蕉が「無分別」を云ひ「子供心を習ふべし」と云つたのは此の能相の心の意識化することを怖れたのである。材料を並べ綴つても平凡な詩にはなる。さうして斯かる平凡な詩作に於てもその材料（所相）を按配してゐる最中は、能相の心情が働いてゐないとは云へないが、ただ極めて微弱なもので、材料を漂はせてゐるとは云へないのである。花田氏の主観的色彩といふものは、「主観を自由によみこなす」程度の意味である。吾等に於ては、それは主観の事實を材料にした寫實歌であつて、主観の歌ではないのである。吾等の主観の歌といへば、芭蕉では



ひいと鳴く尻聲かなし夜の鹿

月清し遊行のもてる砂の上

之等であり、良寛では

朝菜つむ賤が門田の田の面に千鳥鳴くなり春に  
はなりぬ

足引の山田の田井に鳴くかはづ聲のはるけきこ  
の夕べかも

又實朝の歌にも斯かる主観歌の例を多く見ることが出来、溯つて萬葉集には、心情の質を異にするが、無分別に能相の心情を打ち出した歌を多く見るのである。子規の作その三十四年の歌から、よく子規系の人々の引く

瓶にさす藤の花房みじかければ疊のうへにとど  
かさりけり

の如きが何れの種類に属するものであるか、必らずしも、藤といふ景物を歌つたから、之れを

主観の歌で無いなどとは云はない、さう云ふ内外の別は問題で無い。此の一首を始めあの藤の一聯十首は皆寫生の歌である。その次ぎにある「しひて筆をとりて」と題せる病中作の

佐穂神の別れかなしも來ん春にふたたび逢はん  
われならなくに

の一聯六首は子規の作中罕に見る詠嘆の歌であるが、少しも能相の心が所相の側のものを漂はせてはゐない。評者は材料の持つてゐる哀れに惑はされてはならない。之れらを芭蕉病中の作の「病鴈の夜寒に落ちて旅寝かな」「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」などに比べて見たらば能相のけたらきが如何に微弱な表れに過ぎないかを知るであらう。子規のこの種類の歌は萬葉集で云へば家持ごろのもの、それ以後で云へば古今集の主観と略ぼ同一の位置を占めるものである。能相の我れが所相のものの中へ響き入るのでもよい、又浸潤するのでも瀾漫するのでもよい。さう云ふものを缺いた歌はただ人情を哀れに歌つたものである。子規の晩年にさう云ふ人情の多少を貽してゐると云つても、それで子規の寫生歌人たることを蔽ふことは出来ない。潮音が新年號に引いた花田氏の作は二首ある。



埴谷の杉の秀の上に立つ霧の行方もしらになり  
たまひしか

ありし日に畫かしし墨は薄けども畫かしし心見  
つつしのばゆ

子規が歌つたらば「行方もしらになりたまひしか」とまで露骨に切り込まなかつたであらう。「なりたまひしか」は人情歌の詞としても素人の拙さではないか、ここに花田氏らの歌が子規の寫生境を一層細かに進めた弊がある。斯う思つたといふことは事實だから仕方がないと云ふかも知れぬ。それが寫生の弊である。斯う云ふ考へ方のために今の歌壇はどの位抜くべからざる厄難に罹つてゐるか知れないのである。「ありし日に」の歌に至るともう其弊は救ひがたいものである。子規の寫生の弊を内面に移して、さらに一層煩瑣にしたものである。この事はなほ他日「あけび」の歌を論ずる時にさらに詳言したいと思ふ。

以上述べたところで自然に子規ぶりの浅いといふことは了解されるであらうと思ふから、此の點は絮説をさけることにするが、最後に花田氏に云つて置き度い事は、「あけび」の歌に畸形的の寫生の無いのはその心に幾分素直な質を持つてゐるからだと思ふ。それ故にあけびの歌は、今のアララギに見るやうな豹變の推移の跡を、その誌上に胎さなくて済むのは喜ばしいことと云はねばならない。(大正十二年四月)

### 東洋流の愛

歌の出来ないやうな時はきつと心が本當のところへ行つてゐない證據です。本當のところへ行つてゐると、どんな忙しいなかにも周囲をうるほす。さうしてその今してゐる事がただちに歌になつてくるのです。忙がしいと云つて歌の出来ない口實にするのはまだ心の誠が足りないのです。さびしければさびしいなりに、憂ひがあれば憂ひの中に。そこを離れて歌をつくらうとするといつまで経つても歌は出てこないのです。久しく歌を休んで居る人へことにこの消息を差上げます。

觀念といふものはまた理想といつてもよい之は又作に現れる其人の觀相です。觀相のない作



家は寫眞でも撮つてゐると同じことです、觀相の露出をいとふのはよい。しかし觀相までも厭ふてはならない。その觀相の成長が造化の域にまで成長することを祈るべきであると思ふ。

人間同士の愛のみを考へて、萬物のこゝろに思ひ到ることの無いやうな愛は必ず心を破り身を傷ることになります。それは却つて人間の愛といふやうなことを考へないでゐる階級の人達よりも、却つて心の傷手を負ふことが深いのです。萬有の愛のうちから人間だけを取り出して、人間だけの愛を説くところに極めて器械的などころがあります。此の器械的などころが心の傷手を形成つて來るものと思ひます。西洋の詩人はよく人間愛を説く方に傾いてゐます。東洋人の愛は、萬有—山澤や草木やの上へ伸びて行きます。山澤や草木の上に迄伸びて行く心には自ら自分の命を傷けるといふやうな極めて器械的な不自然さは行はれないやうに思ふ。人間の愛は宇宙の心を擔ふところへ行つて、初めてその自然さと安らかさを得るものと思ふ。東洋の言葉に「仁者壽」といふのがある。よい言葉とおもふ。(大正十二年七月)

## 歌心の根、漂ふ境

自分の思ふところを皆のこらず出し切つたと思へるやうな歌は、多くは根の無い巧者の歌である。ただ景色を局限的に器用に構つて來た歌であるか、あるひは心の表面——さう云ふ作者には、心といへばさう云ふ表面的なものしか無いのである。——だけを巧みに歌つたと云ふに過ぎ無いものである。思ふところが深ければ、それをさう容易く出し切れるものではない。思ふところの多くの部分はいつも心の方に残されてゐるやうに感じられるのが本當であらうと思ふ。その思ふところが心の隅々にまで充ち擴がつてゐるものであるといふだけでも、大した根である。この根すらも容易に抜くことの出來ないのが、歌修道の勞苦である。ましてその思ふところの者が世と人とに喰ひ入つてゐる根であり、さらに萬物へ、さらに宇宙へ、無限にゆき渡つてゐる根であると知るときに、歌修道者の勞苦は、はじめて骨身をきざむの思ひがするであらう。ここまで來ないやうな歌修道ならば、それは修道といふものではない、よい歌——よい



藝術といふものは完結されてゐないものだとも云へる。しかしさう云ふ意味の未完結のすがたに於て、はじめて完結のすがたがあるのでは無いか。作物の持つ餘情といふことに就ての考へが、ここへ来て意味深いものになる。出さうと思つてもなほ心に残されてゐるあの限り無い者から加はつて来るものこそ尊いものである。歌は一雫の葉露にはかり知れぬ海の姿を置くやうな険しい心の營みであるとも謂へる。

散るとき心の心安さよ芥子の花

越人

牡丹散つてうちかさなりぬ二三片

蕪村

二つはそれぞれに特色がある。しかしその特色は比べることの出来無い質の異りをもつてゐる。

底に突きあたるやうな歌は、心の浅いところから来る。よい歌は歌つてある事が漂つてゐる。心が深いからである。心深ければ鐵をも漂はせる。浅ければ木すらも沈めてしまふ。自分

は大きな船が船べりを水に深く吞ませて、ゆたかに動いてゆくすがたを見ていつも楽しみを感じずにはゐられない。此の頃信濃の或る友人が尋ねてきて、その地方の洪水の話をして行つた。方丈をも埋めるやうな大石が水をかぶりながらことりことりとすり落ちる音を聞いてゐると、水の力の嚴かさが思はれるといふのである。よい話であつた。激動の心はしばしば境を奪ふやうな力を露はすものである。親の死に走せる心、火事場へかけつける時の心がそれである。さういふ時にあらはれる力には神業とも思へる様などころがある。心の激動が境を漂はすのである。歌もこの心で行くときがあるには相違ない。しかしそれは常住の心から出たものではない。初心ともいふほどの作者が奇効をあげるにはさういふ臨時の力をたのむのもわるい事では無い——新派の歌に親や子の死を悼むために三十首も四十首もの歌を作ることの流行するのも思ひ合すべきである。——ただしかし常住を深めて行かうとする者の心は、たとへば湛へて淵となり湖となり、溢れて海となる心とも云へる。一切を漂はして容與として動くもの姿とも云へる。しかしこの境は容易く言ひうべききなものでは無い。吾等が今に於いて謂ひうることはただその心を深めるといふことである。物が漂ひ言葉がただよふといふことに就てあ



らたなる悦びを感じよといふのである。

徹するといふことは、心が境のあらゆる隈々を浸したきはに於ていはれる言葉でなければならぬ。最も深い水が最も重い物をささへて、まさに底に着かうとする一髪をわづかに保つてゐるやうな心が本當に徹する心である。人はその重いものが水の底へ着いた音をきいてよろこんでゐるかも知れない。それは徹するのでは無い、沈んだのである。物の重さをささへきれない水の力の不足である。しかし反對に水の力が勝つて物の重さが不足する場合がある。薄い板が水上に泛ぶごときのものである。之は漂ふのではない。流されるのである。何れも至れるものでは無い。心と境（物）と互ひに相應する力を以て漂はしつゝ漂ふところへ來て、初めて本當に徹するものと云へる。臨濟禪の開祖義玄の喝に

奪<sup>ヒ</sup>人<sup>ヲ</sup> 不<sup>レ</sup>奪<sup>ハ</sup>境<sup>ヲ</sup>。

奪<sup>ヒ</sup>境<sup>ヲ</sup> 不<sup>レ</sup>奪<sup>ハ</sup>人<sup>ヲ</sup>。

人<sup>ト</sup>境<sup>ト</sup> 俱<sup>ニ</sup>奪<sup>フ</sup>。

人<sup>ト</sup>境<sup>ト</sup> 俱<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>奪<sup>ハ</sup>。

といふのがある。三昧心（徹する心）の四境を説いて遺すところが無い。

或る日翁（芭蕉）幻住庵にて、終日文章に對して俳諧の物語あり。正秀かたはらにありて之を聞くに一事として其の意を解せず、その後龍ヶ岡にまかりて其の事を文章に問ふ。文章いはく、我が問ふところは言語の俳諧にあらず、禪の俳諧なり。正秀問ふ、禪の俳諧とは如何。文章いはく、山はただ青山、雲はただ白雲、芭蕉は實に達磨なるは、と。

心に傷手を負つたと云つて、死んでしまふといふのは受けとれない。それも普通の人ならば許し得る。常に心の問題に就てなやむところのあつた人の所爲としては許しがたいことである。なぜその傷手を所置しようとする心を考へなかつたか。人は過ちのあることを避けがたい。ただその過ちを處する態度の如何によつてのみ、人間の罪はかがやくものとなつて來る。傷手を負つたことに依つて、直ちに死に赴く者は二重の罪を構へることになる。一つは傷手を



傷手の儘で葬る罪、之れは其當事者一個の罪である。一つはその事の結果から来る後世への宿業の罪、之れは衆生全體が負はねばならぬ罪である。罪の苛責に堪へずして死ぬものは、罪の苛責をも怖れず、却つて、毒を食はば皿までといふやうに、罪の上に罪を重ねて生きてゐるものに比べればたしかに勝れてゐるものとは云へる。しかしそれは娼婦蕩兒もなほ取り得る道である。半生の所志を自分の活き方の上に苦しめて來た人の取るべき道は、さらに嚴肅であるべきであらうと思ふ。鞭うたれ、はづかしめられ、踏まれ蹴られて、世の多くの嘲りを負つてゆかうといふ心を持つたらばどうであらう。さういふ心になつて、あの世の死への解脱を、この世の生への執着に轉じたらばどうであらう。樹木が古い傷を持ちながら、その傷をつつんでさらに大きく太つてゆくやうな、さういふ發心に振ひ立つ道に出たとしたらばどうであらう。まことに苦しい道であらう。しかし斯う云ふ忍辱の衣をきて生涯人非人の冷眼を浴びてゆくところに罪の法悦があるであらう。誰れか過ちの無いものがあらう。本當に心に少しの恐怖も無くして、かの罪人を答うちうるものはないであらう。しかし思ひやりの涙で、不義の竣別をくもらしてはならない。A氏は生きながら地獄に落つべきであつた。さうして生涯の忍辱から生

れいづる罪の蟬やきの驗を把つて、一個の罪を除き、同時に後世の宿業の罪をもそそぐべきであつた。

「煩惱即菩薩」といふことを煩惱そのまま菩薩に入ることが出来るといふ風に解するは誤れるも甚しい。煩惱から煩惱を追つてゐたのではないつまで経つても菩提には入れない。ただ無明を闡くにある。無明を闡いて振りかへつて見れば、きのふの岸はすべて光りを被つて見える。穢土即淨土である。(大正十二年八月)



## 通情と屈情

氣を負うてする仕事は、仕損じの多いものである。それは心の居るべきところにゐての仕事でないからである。心が居るべきところに居るとは、心が性のうへに落ち着くことである。性は萬物に行き亘つてゐる普遍の生命である。古人はこれを理と云つてゐた。それ故に性は理であり、理はまた道である。此の上に立つて仕事をする時、その仕事は初めて天下の通理となるのである。行き詰まるところがない。芭蕉が天下の通情と云つたのも此の理に通ずる心である。通情の反対が屈情といふので、芭蕉は口を極めて之れを罵つてゐる。理の通ずるものが無く、只その時々、の氣に任せてする妄力の威などがそれである。根本に通ずるところが無いから、その言葉はただ客氣俗情の勇となり。その藝は多く自然を支配する鬼面の威嚇となるのである。大事に當つてその舉措を失ひ、平素の糊塗を一朝に暴露するも概ねこの心の仕業である。二十歳三十歳の程度で、功を現はすものは、多くはその功に慢じて、世の中を與し易しとする。

するやうな増長慢となる。四十、五十、といへども、なほその憂へが無いとは云へない。五十を越えてますます深く藏するものは天下に稀れとするところであるが、さう云ふ心こそ永世の功を現はすものとなるのである。今の世は印刷物盛行の時である。功なくして功を著はすことも出来れば、功薄くして、功を大ならしめることも出来る。斯う云ふ便利の位置に居るものにして未だ嘗て深く藏して而して遂によく永世の功を現はすものを見たことが無い。今の世の藝術が多く苗にして秀づること無きは、そもそも人の罪とすべきであらうか。時代の罪とすべきであらうか。

之れを多年の經驗に徴するに、年若くして器用な藝を爲すものは——繊細で巧者で纏まつた作を爲すものは、多くは年長けてだんだんにつやも無くふくみも無くかすかすになつてゆくやうに思へる。若い時分に情意が多量すぎて、むらむらと抑へ畢ほせないほどの作者が、年を閲して徐々にその膏を脱いて行くやうなのは頼母しい。芭蕉などの四十歳前の作を見ると、情意が多量に過ぎて言葉に餘るといふやうなところがある。あだかも胸にあまる思ひが喉に塞かれて、たぎれつつ出て來るところがある。それがだんだんに修養の結果、性の落着を得て靜かな



流れとなつて深みもあれば軽みもあるといふ自由な體となつて來てゐる。多分はその人の天分にあるが、修養の効も多しといはなければならぬ。

自性の素直さを矯めてはいけない。萩は萩で美しく、日向葵はまたそれで美しい。どんなものにも、造化は美しさを與へてゐる。一番みにくいのは鴉が孔雀の尾羽を装ふことである。むかし秦に趙高といふ宰相があつた。部下に命じて鹿を馬と言はせて、もし命に叛くものがあると刑を加へたといふ癖がある。今の世にも之に類した馬鹿者がないではない。之れは自性の素直さと美しさを強ひて矯屈して、却つてその寶毒の自身に及ぶを知らないのである。屈情の最も甚しきものである。藝は矯めるに畏縮し、育くむに成長する。矯めるといふことも育くむための心と思はなければならぬ。(大正十二年十月)

## 自然の營み

九月一日の大震、つづいて數十個所から燃え出した火災、それにつれて起こつた種々の風説、東京は全くその意識と批判と自制とを失ふの混雜を惶惑のうちに辿りました。東京がその血走つた眼をこすつて、やや意識を取り戻したのはそれから約十日ばかりの後であります。人々ははじめて周圍の變化の尋常ならぬものであることに驚いたのでした。しかし驚きの心が悲哀を觀念する迄には、あまりにその驚きが大き過ぎる。人々は本當の意味に於てまだ悲哀を識り、無常を諦するところまでの餘裕を持つほどにはなつてゐないのです、その變化の急激な事に於て、その變化の範圍のあまりに廣大なる事に於て、従つてまた吾も人も同様に此の變化の渦中に置かれた故を以て、悲哀は限度を超えて却つて一種の壯烈なものとなつてゐるのが、現在の東京である。東京が此の亢奮の心をそのままに持續してゆくのが幸福であるか、或ひはその悲哀にさめざめとした心になつて世の實相にまで思を深く入れてゆくやうになるのが幸福である



か。今俄かにその事を言ひ分つことは出来ないのであるが、しかし少くも心あるものは人力の到底限りあるものであることに思ひ及んでゐるであらうと思ふ。限りある人力を以て限り無き自然に對抗することの不可能なことを知つて來たであらうと思ふ。斯う云ふ心からは自然への度ましい服従が生れて來るやうに思へる。さうして此の度ましさが自然を潤ほし、さらに自身に反つて、自身を潤ほすものとなる。自然と人との恵みふかい相互化育が此の間に營まれる。自然の營みには悪なるものは一つも無い。天象地形の變といへども造化大法の無限意志の表はれと見るべきものである。人はこの事を知つて此の意志に隨ふやうな生活を組織しなければならぬのに、人はしばしば自身の力を恃み過ぎて自然を侮るのです。たとへば地上に四階五階十階十二階の如き高大なるものを建築する。それは人力の爲さざる無き衿持の驕りからである。人は無常の變によつて、自然から投げられる悲哀を漫然と見すぐしてはならない。此の悲哀を糧として自然への眼ざめを急がなくてはならない。(大正十二年九月)

## 地を震肅する者

九月一日

今日は學校が始まるので、妻は淺草七軒町の女學校へ、兵三郎は市外中新井村の武藏高等學校へ、いづれも朝八時ごろ出かけて行つた。つい此のごろまで家の事をしてゐてくれた一燈園の梶浦たね子さんが、この九月に北海道へ西田氏のお伴をして托鉢に行かれる爲めに辭去されたあとまだかはりの人が見えないので、二人が學校へ出て行つたあとは、私が一人であつた。二階の書齋へ來て、今朝の新聞をひととほり眼を通し、きのふ發送のいそがしさでまだよく見なかつた潮音の九月號を落ちついた氣持ちで讀んでゐた。自分の歌のところを見る。穴吹渡頭から四首がかなり満足に表はし得たと思つた。攝津海上のなかの「さゝぬさゝぬと……」の歌の四句目を初めは「潮泡雪をすすしみにけり」としてあつたのだが、矢張り初めのままにして置けばよかつたと思つた。あちらこちら飽くことも無く讀んでゐるうちに九時になり十時になつ



た。空には雲脚が疾く、南風が吹いてやや蒸しあつい日であつた。

十一時、兵三郎が學校から歸つて來た。けふは始業式だけであつたといふ。二人で晝飯を食はふと、茶の間の飯臺の上を片付けてゐる時であつた。地の底を貫くやうなげしい音がするので、すぐにそれと直感した私は、地震だ飛び出ると、兵三郎に叫びながら、庭の飛石をはしつて玄關の門のところ迄來たが、それからは走らうと思つても地が動くので立ちどを失つて脚が運べない、家のぐらぐらと動くのが見える。門の戸がおそろしい速度で響をたてるのがきこえる。よろめきなら泳ぐやうにして門を飛び出て、すぐその廣場になつてゐる稻荷の鳥居の前まで來て、樹に掴まつてゐると、兵三郎もいつのまにかそこに來てゐた。私はそこで近處の家いきこえるやうな大きな聲で、火元に氣をつけろと叫んだことをおぼえてゐる。隣りは植木の職人の家である。その盲の子を呼ぶ母親の聲が甲高くひびいたと思つた外には、人の聲がしたとは思はなかつた。すべてが恐怖に我れを忘れて聲を黙してしまつたのである。この間僅かに二三分。震動が鎮まつたと思ふと、俄かに人聲がして駈け出して來る音がする。私の周圍には見るまに二十人ばかりの人が集まつた。——二度目の震ひが來た。私はつとめて冷靜にな

つて、今度はその怖しい姿に正しく對さうとしてゐたが、最初のものよりも一層烈しいので、ただもう一心に樹に掴まつてゐたが、踏みしめる土の揺れる不安と、眼に入る屋根といふ屋根から落ちる瓦の響とは、倏ち私の冷靜を奪つてしまつた。人々はまた黙してしまつた。眼の前に兵三郎の顔をはつきりと意識した時には二度目の震動もやや鎮まつてゐた。みつの事が急に心をかすめて來た。下町の方はさぞ酷かつたらう、生徒はどうしたらうと思ふと、それからそれと怖しい光景が想ひ出される。——私は雷も火事も怖しくは無いが、地震だけは殆んど先天的とも云ふべき恐怖と不快とを感ずるので、一寸した地震にも飛び出して家のものに笑はれるのである。

上野の空の方は物凄しい色に曇つてゐた、瓦屋根の土が震動にあふられて空にみなぎつたのである。その土埃が絶えず落ちて來る。大島が噴火したのだと云ふ聲がする。大學は今燃えてゐるといふ聲がする。洋書の紙の燃え灰と思へる黒いものが眼の前に落ちて來る。地震は可なり烈しいのが、殆んど絶えず來てゐる。しかし午後三時ごろと思ふころ來た大きなのを過ぎてからは、ずつと靜かになつて來たが、人々の不安は意識を明らかにするとともにいよいよ濃厚に



なつて来た。稻荷の前には今夜露宿する準備の葎の屋根が俄作りにこしらへられた。私の二階の背面から見える隣家を間借りしてゐた社員らしい人の妻君は、腦貧血を起して人々に介抱されながら、その葎屋根の下に横はつてゐる。ふだんは小綺麗に化粧などもしてゐたその人が、しどけない姿をして寝てゐるのはすさまじいものである。

午後四時ごろ、清さんが日本橋の保險會社から歸つたところだと云つて飛び込んで来た。二階に仕事をしてゐたので、すぐに卓子の下にくぐつてゐたといふ。その會社には幸野羊三君その他三四名の社友がゐたが、皆助かつたといふ。もう火事は神田、日本橋、京橋にひろがつたと云つて、姉の君さんの事を心配してゐる。君さんは上野の驛につとめてゐるのである。五時ごろみつが歸つて来た、學校は職員も校舎も無事だつたと云つて、ややせき込んで本所深川淺草のものすごい火事の様をかたるのであつた。

夜になつた。千住方面とおもはれる空から、淺草方面、日本橋深川方面、神田、本郷方面とおもはれる空へかけて、天の半空は物凄しい火煙が渦を捲いて蟠まつてゐる。それが眞紅に燃えて他の半空の蒼い夜空とくつきり色を劃してゐる。凄愴の美とも云はうか。しかし禍ひはあま

りに生々しく現實であつて、しばらく美の假象たり得るもやがておしよせて来る實感の苦痛のために掻き消されてしまふのである。

予は東京に興起した最近十年ばかりのいはゆる人が稱して近代文明と云ひ、文化生活といふものの真相を今眼のあたりに見ることに不幸に際會した。而してこの不幸の前兆を予は少くも數年前より一つの大きな不安として感じてゐたのであつた。東京よ。それはあまりに科學をたのみ物質に依るもの名であつた。人智をたのむものの落ち入るところは、人力の過大な誇示である。彼れは人間の力をたのみ過ぎた。さうして瓦斯をひき、電氣を通じ、電車を驅り、自動車走らせ、飛行機を飛ばせ、多くの井戸を埋め、濠と池とを平らにして、ただ分秒の時をも利し、僅かに一杯の土をも漁らうとした。

いきほひの赴くところ斯うして東京は互ひの聲に誘はれつつ到頭來るところまで來てしまつた。昨年の半ばごろから、今年の春にかけて、東京には何何舞踏といふ男女の猥褻な會合が流行した。予は思つた。もう東京も終りであると、さらにその前後引きつづいて起つた學者文人等のいまはしい事件を耳にした時、いよいよ凶兆の露はるべき時が近づいたことを感じたの



である。淺草に行つて何々オペラといふものを見た人は、ああいふものが到る所に迎へられて、殆んど世の青年を風靡する流行となつてゐる有様を見た人は、斯う云ふ嗜みが人と世とを頼母しいものにしてゆくもので無いことを感じたのであらう。一本の葦に依つて大水の東するを知るといふ。それ等の事はもとより一小些事であらう、しかし頼母しい世に起こるものと、末法の世に起こるものとは、些事にもその色合を異にする。世をあげて功利に赴くとき、功利の隨縁者は心慢じて慾望のかぎりをつくす。功利の失落者は意氣沮喪するか、あるひは翻つて反動の不逞者になるかである。而してこの風尚の依つて來るところは早くすでに日露戦争の終りにある。明治を終へて大正に入るに従つて、この混濁の濃度は一層險はしいものとなつて、遂に今日に及んだのである。東京は之れは稱して文明と云つてゐた。さうして自然の持ち來たす報復などのことは、殆んど彼れ等の意識にも上らなかつたのである。

第一に彼れ等は、その所謂文明の機關なるものを出來るだけ複雑に施設したのであるが、それに應ずる設備の事を少しでも考へてゐたであらうか、狭い土地に詰め込めるかぎり人間を詰め込んで、その事から來る結果の怖ろしさを一度でも思つて見た事があるであらうか。彼れ等

は常に自然を壓伏<sup>しひた</sup>げてたゞ之れに勝たう勝たうとばかり考へてゐた。自然を壓伏<sup>しひた</sup>げ得ると思ふところに即成文明、皮相文化の破綻がある。見よ斯かる文明の領有を多量にしたものほど、その殃ひのより多くを喫しなければならぬ結果に至るであらうことを。東京は——また日本は、自然を壓伏<sup>しひた</sup>し、もしくは自然と對抗し得るものとの新しくして然かも舊い觀念を根本より改めなくてはならない。吾等は今や、歐洲ルネッサンス以後充進して現代に至つた物質科學の罪の一面を冷靜に凝視すべき機會に立たしめられた。歐洲戰亂は彼の國に於けるその罪の顯證の最も明らかなる裁きであり、今東京を燄と化しつゝある此の大震の慘禍は此の國に於けるその徵證の手厳しき審判となるであらう、自然に隨ふものには、悦びがあり息ひがあり、心の養ひがある。東京よ。汝は再び空<sup>そら</sup>なる文明の爲めに奮闘とやら云ふかの某國大統領などの云ひさうな言葉を標語とするの愚を永久に學ぶべきではない。——奮闘ではない。營みである。營みは化育である。蜘蛛の絲を編む如きもので無ければならない。——東京は或ひは今宵一夜に焦土の曠野と化するかも知れない。さう云ふ不幸の來ん日の曉に、心を靜かにして來るべき世の準備をしなくてはならない。人々は思ひきつてその生活の様式を簡素にしなくてはならない。



木を植ゑよ、さうして東京を森の都とせよ、寺を興せ、さうして朝々の鉦の聲を森にひびかせよ。家は樹木に據りてわづかに屋を支ふるの程度にあらしめよ。出来るだけ多くの菜園をその後庭に開かしめよ。井戸を掘らしめ、溝渠を導き、各戸の高さと大きさとに制限を興へしめよ。電車汽車の線路を或る區間だけに制限し人々の手脚と體力とを自然の態に復せしめよ。自動車は少數の者のために多數者の不快を顧みないものである。公用非常の外は之れを絶対に禁止せしめよ。

地を離るるものには禍ひがある。今の文明は便利のみを目的として、その便利が却つて身を不具にし心を傷けつつあることを知らないのである。斯くの如くして何のための便利であらう。しかしそれもこれもたゞ自己の利益を大ならしめようとする世紀末思想のよつて導くところのものである。人々はどこ迄も自然に育くまれ、自然に養はれつつあるものぞとの感を強くしなくてはならない。地震、雷風、暴水は所詮人類の避けらるべきものではない。それは天柱と地軸とから來る力である。弱小の人力を以て對抗しうべき性質のものでは無い。しかし人が自然に随つて生を營めば、その害(咎め)を受けることを少なからしめることが出来る。予は

日比谷に行くごとにかの丸の内に蟠居する何々ビルディングといふものに不安を感じないことはなかつた。たとひ大震が來ないにしても、斯かる建築物は眼に視ることだけでも不安である。しかも一度地に大震の來た時にかに恐るべき結果に逢着するかを思つて慄然たるものがあつた。——今も今、そこを駈けて行く避難の人が警視廳、帝劇が焼け、つづいてビルディングの破壊を告げて行つたのである。——予は木造の家屋を愛するものである。木造は人を養ふ感じであり、石造と鐵筋とは人を脅やかす感じである。石造鐵筋の家屋に身を固めてゐて自然の化育を説くとすればそこに何か落着かない心の杆格を感じるのもわかる。或る人は木造の家は火災に罹り易いものと云ふであらう。しかし世の組織が變つて、吾等の政治が吾等を普通の教養の世に置いたならば——さう云ふ靜かなる營みの生活の世が來たならば——心の粗雑と生活の不統一とから來易い火災の過ちは或る程度まで防止しうると思ふ。(今燃えてゐる火事が下町に多いのもその一斑を思ひ合はすべきである。)予はおそる、もし東京が不幸焦土となる明日に於て、所在の文化人が相寄り相集まつて、再び舊東京の醜くく潤ひなき文明をそのままに繼承し、もしくは増大するの舉に出づるあらんことを。吾等の家は止むを得ぬものの他は成るべ



く軽くつつましく、古代日本人の住居の如く、はづかに樹木に隠るるの程度にあらしめ度い。石をよろひ、鐵をまとふこといよいよ堅ければ、身を八裂にする日の再び到来することを覺悟しなければならぬ。——今度の地震よりもさらに大きな地震が来ないとは誰れが斷言し得よう。甲をよろふ龜は却つて身を碎くといふ。予は識者が一に二にも西洋流をまなぶの愚かさを斥け度い。

物一つひさごは輕きわが世かな

芭蕉

もうあたりは全く暗くなつてしまつた。向ふの空の火焰はのろのろしい紅色になつて、庭の木の葉を鮮やかに照らし出した。到頭屋外に座をつくることにし、庭の隅の竹の一むらがりむらがりに生えてゐる中へむしろを敷き、張板をならべて、その上で夕飯をたべた。小さい地震はしきりに來つつある。しかしいちやく眠りに入つたのは兵三郎であつた。

(大正十二年九月)

## 自然の意志

自然はその意志に随つて自らを生長させてゆく、その生長の歩みは常に靜かである。時あつて急劇な躍進を企てるものの如く見えることがある。この事を季節の變化の上に於て考へて見ると面白い。季節の移りは誠に靜かである。いつ移るともなく移つて、到頭落葉の時にのぞむ、さうして滿庭の梢を一時に振ひ落してしまふ。自然の力(生命)が此の一期に功を露はしたのである。たとへばささやかに常住の滴りを以て湛へられてゐる水が、湛へきはまつて淵を乗り越えて溢れる如きものである。人はこの溢れる際の姿を見て、自然の變を急劇あせりしいものとするのであらうが、それは急劇しいのでは無く、水の常住の營みが一期の功を擧げたのである。水の運歩にはいささかの變りも無いのである。水は——土は——自然は、その事を意識してゐないのである。自然はいかなる場合に於ても、己れの功を人に誇ることはない、ただ黙々として、その殆んど無爲とも見ゆる營みを不斷の時の上に展べてゐるのである。



自然が時々露はしてゆく功は、人間に取つて必ずしも幸福のものとは限らない。しばしば人の世の不幸となる場合がある。人はその功の自己に都合よき場合のみを恃んで、自己に都合悪しき場合を厭ひ、もしくは憎まうとする。それは此の宇宙を人間のみの爲めに在らしめようとする利己のわが儘からである。このわが儘から人は自然に對して繁縷なる作爲を企て、來る。その作爲が自然に逆らふことなく、自然を導く程度のものである場合は、自然は多く悦びを以てその功を露はしてゆくのであるが、一度び自然の心に逆らふやうな作爲を加へる時は、自然は、あべこべに人間の作爲を反用して——人間が自己防備のために構へた諸機關の力を取つて、——之れを人間への災禍の形に於て下すのである。自然はあだかも人間への逆襲の形を取つて立ち向つて來るやうに見えるのであるが、しかも此の時といへども自然はそれを意識しないのである。自然はただ不斷の默爲を進めてゐるに過ぎないのである。人はたまたま此の默の力に觸れて吾れと吾が作爲の良に掛るのである。之れを自然の報復の名に於て呼ぶのであるが、自然が報復するのでは無い。人間が自身の刃を以て自身に加へたのである。

自然は生命である。生命には意志がある。此の意志の方向を嚴密に知ることの出來ないところに自然の大きさがある。自然は、人が自身の目的を意識する如く、その目的を意識してゐるか否かといふことは、知るよしも無いのであるが、しかし自然の意志の方向が萬物の化育にあることは動かすべからざることである。實に自然の一切は化育の相互惠沃である。此の事は少しく自然に心を向けることの深いものは、殆んど知るに難からぬところであらう。それ故に天象地形の變といへども、同じく此の化育の途上に於ける自然意志の現はれと見なければならぬ。西哲は之れを「無限意志」の名に於て、また「不可知世界」の名に於て、或ひは「神」の名に於て、呼んでゐた。東洋に於ては之れを「天」の名に於て、或ひは「神明」の名に於て、さらに或ひは「佛」「如來」の名に於て呼んでゐた。名づけるところは異なるが、その現はさうとする主體は一つの方向ある力である。その力は冥護もしくは「愛」「救ひ」等の名に於て、その方向は「生々」「流轉」もしくは「化育」等の名に於て呼ばれてゐて、その間に多少の差はあるが、ひとしく萬物の欣榮を頌する心である。



かう云ふ心にかけて、吾等は自然の變——地震、雷風、暴水——を見ようとするのである。之れ等の事は人間の立ち場から見れば、すべて一つの災禍として受けとられるのであるが、自然は災禍を下さうとしたのではない。自然は萬物化育の大きな営みを——その靜かなる営みの歩を常の如く進めてゐたに過ぎないのである。人はその變象の現はるるその倏忽の相を見て驚くのであるが、自然の意志から云へばただ絶え間なき営みが、その功をこの一期に著明にしたのである。あだかも、春から夏にかけて動いてゐた地氣（生命）の磅礴が木の葉にまで臻つて、初冬の搖落が一夜に来る如きものである。地震、雷火、水氣は天地の間に常に醞釀かもしれつつあるものである。たゞその功を露はす時は一刹那に過ぎないがゆゑに人間の淺見はこの一刹那の變に驚いて、之れを自然の暴威などと云ふのである。——道元は地形の變を山流の名に呼んでゐたらしい、東洋古哲の陽氣と稱するものはこの天地に磅礴してゐる生命の意志を呼ぶものに相違ない、陽氣の發するところ、金石もまた透るのである。——それ故に吾等は自然に従つた生活をするより外に、此の異變に處する道は無いのである。自然は此の事をよく人間に分かるやうに

教へてゐる。見よ鳥の巢を、地震にも暴風にも何の害をも受けないのである。人間が樹と土とに親しんだ家屋を構へて置けば、大震はただ微動を興へてゆき過ぐるのであらう。大震の災禍が慘狀を呈するのは、不用の重さと量とをその家屋に負はしめたるためである。——予の論はここから當然に現代文明の制限にゆき、さらに哲人政治のことに進むのであるが、それは他日にゆづる。

宇宙の意志の方向（化育）に伴はないやうな人間の生活は、すべて宇宙の意志の咎めを受くべきものである。何となれば人もまた宇宙の意志の内なるものであるが故に、宇宙の意志を離れては、その生命を展べることは出來ないのである。而して人の営みが同時に宇宙の営みとなり、さらに此の営みが宇宙の営みの無限に與かりうる所以もここにある。この事は延いて吾等の藝術の上の規範とならなければならない。

諸法の法を信するものには怖れはないであらう。ただ法のまにまに、ゆくもかへるも、生く



るも死ぬるも、法のままに打委せた心には、怖れといふものは無いであらう。之れはまた神のみ心のままに委せまつるといふ希伯來の思想に見る心とも異るところが無いであらうと思ふ。たとひ天が裂け、地が覆るやうな宇宙劇動の前に立たしめられることがあらうとも、天地を住家とするものは——天地より外に生命を據せるところの無い吾等は、所詮天地の爲すがままに任せるより外に道が無いのである。生殺與奪の鍵は一にかかつて造化の意志にあるのである。之れを神の名に於て、又は佛の名に於ていふならば、生くるも殺すも、何れなりともみ心のままに爲したまへといふより外は無いのである。畏るべくして、しかも怖るべきでは無い。ただ宇宙の意志の命するところに従つて、最後までかの攝取の力を持まねばならない。

吾等に來れる生命は、眞に正しき義に於て吾等の所有であらうか、人の世の律法に於てはもちろん各個人の生命は各個人の所有であるに相違無い、しかし之れを造化萬物の上に於て考へる時、吾等の生命の收授、開藏は彼の木の花の來り逝く如きものであるに相違ない。無限に生みゆく宇宙の意志はまた一方に無限に滅ぼし行くべき意志であるに相違ない。生長といふこと

は此の無限生滅の流轉の上に名づけた言葉である。生みゆく一面を見れば悦びの相であり、滅びゆく一面を見れば悲しみの相である、宇宙の法を體することは此の兩面を宇宙一體の活機として知ることであらう。かう云ふ活機をわが心の法とするところに、宇宙に隨つてしかも宇宙を脱却（宇宙と我れとの對立を空する境）するもの的高き心がある。かう云ふ心法の體得境に於ては、生命への細心なる愛護があるとともに、生命への大膽なる棄却があるであらう。それはまた徒爾の死を避けようとする尊き畏れの心であるとともに、より大いなる生命への躍進の鼓舞である。吾等が生命に處する道の重大もここにある。まことに天梯をのぼる如き苦痛の修道である。犬死は爲し易い。犬死よりも恥づべき死を執行して、之れを歡喜の死といふならば、眞理のために毒盃を仰いだ哲人の死の如きを、何の名に於て呼ぶべきであらう。

（大正十二年十月）



## 俳諧の交響樂

霜月や鶴かのつくづくならびゐて冬の朝日のあは  
れなりけり  
らうたげに物讀む娘かしづきて燈籠二つになさ  
けくらぶる  
ほととぎす待たぬころの折もあり雨の若葉に  
立てる戸の口  
きぬぎぬやあまりかほそくあでやかに風ひきた  
まふ聲のうつくし  
月と花比良の高根を北にしてひばりさへづるこ  
ろの肌ぬぎ

ややおもひ寝もし寝られず打ちふして米つく昔  
は師走なりけり  
千部讀む花のさかりの一身田順禮死ぬる道のか  
げらふ  
何よりも蝶のうつつぞあはれなる文書くほどの  
力さへなき  
鳶の羽もかひつくりひぬ初しぐれ一吹風の木の  
葉しづまる  
灯ともしに暮るればのぼる峰の寺ほととぎすみ  
な鳴きしまひたり  
さまざまに品かはりたる戀をして浮き世の果は  
みな小町なり  
手のひらに風這はする花のかげかすみうごかぬ



晝のねぶたさ

寝どころに誰れも寝てゐぬ宵の月どたりと扉の

ころぶ秋風

之れは芭蕉等の七部集の中にある附合の形であるが、之れは其後の歌の發達の形の参考になるものである。人事にも自然にもずつと深く多様な變化に苦心しなければならぬ精進の筈がここにある。

「霜月や鶴のつくづくならびゐて」には、此の鶴を中心にした一つの完成された世界がある。また短句の「冬の朝日のあはれなりけり」には、冬の朝日を中心にして動いた作者の感情の統一世界がある。之れは長句と短句とを別々にひき離して見たうへの感じであるが、之れを引き離さずの一つに纏めて見ると、さきに各獨立してゐた世界が互ひに融通して、さらに新しい内容を持つた完成の世界をあらはして来る。別々に見てゐた時には、もう此の上に何も加へることを要しないほどの完成さに置かれてゐたものが、二つを合せて見ると、さきの完成の形は俄かにその完成の限界を解いて互ひに吸ひ合ふやうな感じで融通するのである。さうして此の形に

於て全く無縫とも云ふべき第三の世界がつくられて来る。かやうに一つ一つの世界がその限界を障害とせず、互ひにこころよく融け合ふ感じを豊富に味はふとする處に、連句作者の無限の生命の追求がある。この追求の上に各作者（一座）の生命の無限の發展があるとも云へる。之れをただ面白可笑しい遊戯であると見るのは、人の生命の交融に就てまだ深い考へを盡さないものと云ふ外は無い。

連句に於ける此の生命交融の快美感は、宛かも音楽の交響美を追求する樂手の心持と異るところはあるまいと思ふ。交響樂に於ける個々の樂聲はその各に於て獨立した生命（感情）の統一である。それが互ひに入りみだれ相交はるところにさらに複雑な新しい生命の統一がある。此の統一の形は個々の樂聲の融合のこころよさに於ける生命の發展であり開展である。個々の樂聲がその各の生命の完成さをもつて、さらに豊富なる生命の完成を形ちづくるところに、交響樂がもたらす大きな生命の躍出がある。此の場合此の交響の統一世界を名づけて、之れは個々の樂聲の集合であるから、完成な藝術ではないと云ふものがあらば、寧ろ笑ふべきであると思ふ。俳諧連句に於ける個々の作者は言葉を持つて、皆おのおのの樂器を鳴らしてゐるのであ



る。その言葉の持つ「さび」「しをり」「にほひ」「ひびき」「うつり」はその樂器から奏でられるリズムである。此のリズムの重層する形を融合の豊かさにて味はふとするのが俳諧である。冬季の句の次ぎへ夏季の句が來ると云ふやうな矛盾はある。それは炬燵にあたつてゐるものは、炬燵の周圍のことを思ふのはよいが、吉野の花を思ひ、加茂川の納涼を想つてはならないと云ふのと同じである。人の生命（情感）の無限の發展——それは多く聯想の形に於ける——を強ひて窮屈にしようとする窘束文藝の誤解からである。個物もしくは個立の境などを寫生するものが文藝の境地であると思ふやうな近世の科學的文藝の誤見を撤しない以上、さらに俳諧の一卷を貫く主題は意味のつながりで無く、感じのつながりであるといふことこの理解を持たぬ以上、俳諧を以て支離滅裂のものとするやうな誤謬に陥いるのは當然である。而かも斯う云ふ誤謬に座し乍ら、俳諧の生命に面しようとするのは亂暴の事といはなければならぬ。

芭蕉の俳諧を世話にくだけて世話に凝つた藝術であるとするのは、前にあげた連句を讀んで見れば、ある程度まで分らうと思ふ。世話にくだけることだけならばさほど困難では無いと思ふが、くだけてさらにそれを詩の緊密なリズムの上に置いたことは吾等の驚きとするにあまりあることである。芭蕉はこの事を「俗談平話をただす」（芭蕉遺語）といふ言葉で云ひあらはしてゐる。俗談平話のままでは詩とはならない。それを「ただす」ことによつて詩となるといふ意味に解する。ただすとは詩の姿にととのへることである。俗言を雅言の形に翻譯するので無い。土塀と云つては品がないから「ついひぢ」とする。火鉢では露骨だから「火桶」「すびつ」とするといふやうなことを云ふのでは無く、土塀、火鉢、その他動詞、形容詞、助動詞、感動詞にまで亘つて、俗言のまま、それが詩の緊密さを持つて來るやうに苦心するのが「正す」のである。

寝どころに誰れも寝てゐぬ宵の月どたりと塀の

ころぶ秋風

斯う云ふ形が芭蕉の俗談平話をたゞした形ちである。之れをもし今の口語歌などのやり方にしたならばどうなるであらう。

誰れもゐない寝どこに月がさしてゐるわ。秋風に

塀のたふれた地ひびきがする

俳諧の交響樂



といふやうな形に表はすであらう。之れは七部集中の一聯を土臺にして口語歌にして見たのであるからその内容がすでに詩の質を持つてゐるのであるが、今の道路の口語歌は、その内容からしてがすでに詩にならないものを強ひて外部から感情を塗りつけて、それを緩漫な卑俗の心で詠んでゐるのであるから、もとより詩にならう筈は無い。口語歌はまたの名を生活の歌だといふ。日常生活を日常の言葉で表はすのだといふ。趣意は一應うなづけないことは無い。たゞしかし彼れ等は日常生活のどこに詩があるか、日常の言葉のどういふ形が詩のリズムを作つて來るかといふことを考へないのである。詩の内面から盛りあがつて來る感動は、自然に日常語を洗鍊し陶冶して、芭蕉のいはゆる俗談平話をただすことになるのである。たとへば。

空豆の花さきにけり麥のへり 孤屋

晝の水鶏の走る溝川 芭蕉

上張りを通さぬほどの雨降りて 岱水

そつとのぞけば酒の最中 利牛

寝どころに誰も寝てゐぬ宵の月 芭蕉

どたりと塀のころぶ秋風 孤屋

きりぎりす薪の下より鳴出して 利牛

晩の仕事の工夫するなり 岱水

といふ一聯について、一語一語を検すれば必ずしも俗言のみでは無い。しかしこの一聯にみないぎる言葉の斡旋は全く世話俗談の體であつて、從來の和歌に於ける言葉の斡旋とは明らかに差別さるべきものである。それが一分の隙も見せぬ緊密さを以て、詩の多様なリズムを行つてゐるところ、世話にくだけてしかも世話に苦心した跡の歴然たるものがある。今の短歌の姿をこれなどに比べると、まだ一首一首の緊密さに於て遠く及ばないところのあるのはいふまでも無い。その内容の單調なる。従つてその冗漫さは俳句の端的直入なるに比すべくもなく、その言葉は舊式和歌のぬめりを多分に有つてゐて、従つて情緒の過多から來る垢や脂を脱しきれないところがある。この弊を最も著明に示すものの例として、ここにも近頃の口語歌を引くのが極めて適切であるやうに思ふ。そこには顔を赧くして聞かなければならないほどの稚弱な言葉があり、黄いろい細い男女の假聲があるのに氣がつくであらう。之をたゞ口語歌の上のこととば



かり思つてはならない。今の短歌といへどもまた此の稚弱ちじやくさと思おもひ差さげさを多分に持つてゐて、到底大人の藝術たる洒脱、老蒼、高古、平遠等の境地に到り得る日の遠いことを思はざるを得ない。(大正十二年十二月)

## 自然の啓示

震災は大きな事變であつたが、震災にいつまでも執着してゐてはならない。之れを深い追想と自戒とのうちに送りやつて、眼をあげてさらに新に足をあげなければならぬ。いつのまにかもう木は姿を變へて春を待つ準備をしてゐる。自然の推移はつねに新でつねにたゆみが無い。吾等が人間の屈托に囚はれてゐる間に、彼れ等は永世への歩みを靜かに轉じつつ、苟くもその愛育の跡を消すことをしない。心を自然に傾けてゐるものには自然はつねに驚くべき啓示を以て臨んでくれる。人間が踟躕し、逡巡する時、乃至追惑し、焦燥する時、つねに靜かなる姿を以て、之れを導き之れを勵ますものは自然である。それはまことにもどかしい、齒がゆ

い、廻りくどいものを感じであるが、それゆゑに吾等の心がどのやうに靜められ、湛えられ、深められるかしかない。これをもどかしいとして、人が粗忽にも一氣の飛躍でもしようとする時、その心の後ろに大きな洞穴が掘られてしまふ。その穴をうづめるために、心あるものはどれ程の悔いと徒勞とをしなくてはならないか。心無きものはその穴の掘られてゆくことに少しも氣がつかず、すんずん向うへと乗り出して、つひに一生涯の病根をつくつてしまふのである。人の病根が失意の時に來ることは稀れで、得意の時に來ることを多しとするのは斯う云ふところにあると思ふ。乗り出よう。さきがけをしようと思ふ心は、一番自然の心に遠い姿である。靜かに五十年の歩みをつづけようと思ふものは此の邊の理りに心を置いてかりにも慌ててはならない。商賣の道の人などの盛んな仕事は十年位を境として、多く衰への色を表はして來るのは、商人の仕事がつねに心後に洞穴を作つて行くやうな荒々しい仕事だからである。近頃は藝術も商賣らしくなつて來た。まことに人心日に危ふく道心に微なりである。新年の始めに此の言葉を記して自ら戒め、一は以て我が同信の人々に送らうと思ふ。(大正十二年十二月)



## 讀書

古人の書を読むといふことは、古人の心を読むことである。古人の心を読むといふことは、古人の心に表はれた自然を読むことである。一道の達人ともいはれるほどのものは、大方自然の理を觀ることに於て暗からぬ人々であつた。釋迦や基督はいふまでも無い。それほどの神人でなくとも、自分の生き方に就て考へてゐた人々は、その生き方に安定し知足してゐたほどの人は、かならず自然を充してゐる道理に朝夕の心を置いた人々である。さう云ふ意味の生活の記録が書物となつて遺されてゐるのである。たとへば論語をひもといて「子、釣して而して網せず、弋して宿るを射ず」といふ言葉に接するとき、或ひは「子、川の上りに在して曰く、逝く者は斯くの如きか、晝夜を舍かず」といふものの如き、或は「暮春には春服すでに成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らん」といふものの如き、斯う云ふ心持が今の政治の人々などに多少でもあつたらば、どんなに世を潤ほす事かと思ふのであるが

残念なことである。

古人を読まないものの思案は亂に至る、古人を読まないものの作物は涸渴する。彼れらは古人を読まないでも自然さへ觀てをればよいといふだらう。しかし自然を觀て眞に悦びを感じるほどのものならば、その心は多く古人の心に赴くであらう。何となれば古人の書物はすなはち自然（眞理）の啓示だからである。古人の書物が、百年、五百年、千年、數千年を経てなほよく突々なる生命を保つてゐるのは、之れ等の書物が、自然の活經であるからである。之れを疎かにする心はまた自然をも疎かにする心である。釋迦傳統の諸經、孔老諸子の經典などは暫く謂はないとして、何よりも先づ歌道に心をかけようとするものは、西行、芭蕉、良寛は云ふまでもなく、伊勢、源氏、枕草紙、徒然草、歌集では萬葉、古今、新古今、七部集等之れ等の書物に愉びを感じるほどの程度になつてゐなければ恥かしいことであらうと思ふ。（大正十三年一月）



## 感情的功利主義と童心

紀記時代の歌は、殆んどこのらすと云つてもよいほど、その歌は自分の感情——悲喜哀樂——を中心にして歌つてゐる。自然は多くの場合、その自主的感情の序であるか、或ひは形容であるか。或ひはその譬喩かである。自然を自然として、獨立したものととして歌つて、しかもそれが、全圓的に自己の象徴となつてゐるやうな歌は、全篇を通じて僅かに二首である。それは神武天皇の皇后、媛韜五十鈴姫の御作であるところの

狭井河よ雲たちわたり畝傍山木の葉さやぎぬ風

吹かんとす

畝傍山ひるは雲とゐ夕されば風ふかんとぞ木の

葉さやげる

この歌である。之れとても古事記の本文を見れば、皇后が皇子の危難を免れしめようとし

て、庶皇子手研耳命たぎしめみみみことの叛逆に備へさせられた諷示の歌である。「木の葉さやぎぬ風ふかんとす」「風吹かんとぞ木の葉さやげる」は、ともに手研耳命の襲來の意であつて、その意味に於て、此の二首とても全き義に於ける自然美の獨立とは云へないのであるが、しかしそれは記の作者の考へである。吾等はこの二首から、以上の諷示を取り除いて、完全に自然美の獨立した形を認めるのである。さうして神武天皇時代にすでに自然を自然として觀照し得る智能が發達してゐたことを承認しなければならぬことになるのである。此の皇后の二首が果して皇后の作であるかには疑はしいところがある。此の歌の言葉の斡旋には、少くも推古朝以後で無ければあり得ないと思はれるやうな調べの完成がある。その完成を他の言葉で云へば、古代素朴詩の持つ肉體的の刺撃感情よりも、もつと深められた——或ひはもつと清められた純粹なものから出て來た形ともいはれるべきものがある。この純粹さは情感が情感だけで動くときには表はれないもののやうに思ふ。情感が躰慾的に動く場合は、言葉に太みや厚みや、は持ち來たしうるが鋭さや強さ、殊には旋形的に弧線を描いて迫つて行くやうな力は表はれないのである。情感が情慾を絶して、或は意識を空じて動いてゆく時の言葉にして、はじめて鋭さと強さとをもちう



る。それは白い光りともいふべきものである。智から云へば第一線に立つた智であり。感情からいへば悲喜哀樂を意識しない前の氣先とも云ふべきものである。之れを名づけて直観といひ度い。詩に直観を尙しとするのは、この智とも分れず、情とも別れない心の閃きの刹那に於て生命の實相に觸れるからである。

今、皇后のこの歌を見ると、他の紀記の全部の歌謡が、すべて肉體的の感動を主にしたものであつて、従つて情感の功利主義——自己本位の悲喜哀樂の感——に落ちてゐるのが多いのに、之れはさうで無く、その雲や風や木の葉によつて統一された景觀を、自己の功利的感情（悲喜哀樂の意識）から離して感じてゐる。それはもちろん此の景觀に對して感情なしには對せないのであるから、その意味に於ては、自己から離れることは出来ないものであるが、同じく情感を以て對してゐるといふものの、それを自分の運命や、戀愛の成否や、身體的苦痛の上に持つて來て、それを結びつけて感動する（紀記にはさう云ふ歌が最も多數を占めてゐる。）のは異つてゐる。さう云ふ感じ方を何と云つて言ひ表はしたらよいかといふに、吾等は之れを、自然の純粹な生命に觸れたものと云ひ度い。なほ進めていへば人と自然とが互ひに純粹な意識

を交はしたのだと云ひ度い。詩はこの程度に來て、初めて無意識に宇宙の營みのなかに活きたと云ひうるのである。或る人は之れを自然の美に觸れたものといふかも知れない。美でもよい、ただ此の美は斯う云ふ意味に於ての美であると云ふことを斷つておきたい。斯かる美は通俗の意味に云ふところの美でも無く、同様の義に於ける道義でも無い。美を越えた美であり、道義を越えた道義である。もし云ひ得るならば意識界の分別を空じ去つたところの宇宙——自然——人間——の誠であると言ひ度い。此の域にあつての生命の動きは、美醜、善不善、眞偽を超越してたゞ動くのである。思慮をこえてたゞ動くのであるが、それが自ら人と萬物とを貫く道となるのである。孔子のいふところの「矩を越えざる」の境である。老子の「玄のまた玄」莊子の「逍遙遊」といふもの、宋儒の「太虚」といふもの、釋氏の「華を拈つて微笑する」といふものが之れであらう。精神の三昧境また意識の純粹活動である。

紀記の全部を通じての歌には熱い感動はあるが、それはまだ白熱するやうなものではない。冷めたい感じを以てゐながら、内面はつきつめたところへ這入つて、一筋に燃えてゐるといふやうな純粹意識の活動から出てゐるものでは無い。今の人の説くところの童心といふものにふ



さはしいものが紀記の歌の中にはずる分多くあるのであるが、それは實の子供の持つてゐる幼稚である。實際の子供の心といふものは詩であり得るけれど、それには多くの不純なものを併せ有つてゐるのである。藝術に童心を尊ぶといふのはさう云ふ意味の幼さではないと思ふ。

おもしろし雪にやならんけふの雨 芭蕉

いざゆかん雪見にころぶところ迄 同

にしても子供らしいには相違無いが、紀記の多くの歌の持つてゐる功利的感情とは異つた、きはめて純粹なところへつきつめてゐる刹那の心持ちである。思慮をつきぬけて意識の第一線（氣先）に立つて吟をやつてゐるのである。ふだんの念々の蓄積が、自然の刹那の機に觸れて、鋭となつて燃えるやうな姿ともいはふか、或ひは彼れの平生心がその活動の線を一進して意識以上の線にまで動き出したとでも云ふべきものか。その平生の存養と工夫とが周到であればあるほど、その念々の蓄積が深ければ深いほど、その生命の機に觸發する意識の純粹さは一層の純粹さを加へて來るのである。

ひいと鳴く尻聲かなし夜の鹿 芭蕉

石山の石より白し秋の風

同

からからと折ふしすごし竹の霜 同

この種類のものがそれであらう。古代の素朴詩には斯う云ふ種類の童心は絶無といつてもよい。古代の詩に持つてゐる童心は、童心で無くて生なまのままの幼稚さである。生のままの幼稚を捕へて、芭蕉や良寛に表はれてゐる童心と同じに見るのは、初步の童心と結局の童心とを混淆するものである。

それで神武皇后の御作と言はれてゐる二首の歌が、紀記の中にあつて、その調べが緊密であり、ことにその自然の景觀を利己的感動から離して、純粹な意識の活動の中に在らしめた點に於て、この歌は單に自然美を獨立せしめた最初の位置を占めるのみで無く、或ひは我が國に於ける象徴詩の典型を初めてここに作りあげたともいふべものであらう。良寛の歌などに表はれてゐる意識活動の情景をこの歌などにくらべると、さらにその線が進められて、全く汎い豊かなところへ擴がつたものとなつてゐる。彼れは安靜にその境をひたして、充ちきつてゐるものの姿である。それが彼れの平生心である。燃えてゐるといへばかすかに恒に燃えてゐるやう



な温かさである。平生心を一歩進めて、特に三昧境（純粹意識）を喚び來たす必要が無いのである。それ故に強いか、鋭いか、切迫するとか、いふやうな積極的精神は、彼れに於ては過ぎ去つたきのふの事である。芭蕉に或る力の強さを感じ、良寛にゆたかな温かさを感じるのは、そこから來る。ともに童心に到着してゐるが、芭蕉の童心は、まだ努力を要する程度のものではあつた。

しかし芭蕉も死ぬすこし前の心持ちなどは、良寛の今遺されてある歌は、多くは彼れの備中の修行から歸つての作と思はれるから、年齢に於ても少くも四十七八歳以後の作であらうと思ふ）もう良寛の心にすぐ接続し得る程度のところまで來てゐたと思へる。そこには裕かに人の心をひたすものが匂はされてゐる。力では無い。力よりも以上のものである。今の歌壇俳壇の人たちは、生々しい幼稚に復らうとして、日に後退の道を取つてゐるやうに見える。知識や分別や生活苦やをつきつめて、前へ前へと進めて行く内面の苦闘を避けてゐるやうに見える。さうして自ら欺いた幼さ（童心）に復らうとしてゐるが、それは到底出來うべきことでは無い。それ故に幼からうとして却つて智術の醜を曝露することになるより外無いのである。近頃流行

する童謡などを取つて見ればその事が最も分明する。或るものは眼をつぶつて強ひて童形の痴呆を歌ひ、或るものは分別顔をして強ひてよだれを垂らしてゐるので、そこにはただ滑稽があるばかりである。斯かる種類の作品が兒童の前に運ばれることを思ふと、心を寒からしめる。

（大正十三年二月）



## 短歌の持つ統一世界

ある一つの境地からただ一首の歌を得、一句の發句を得ようとして心を盡した古人の勞作にくらべて、今の歌人の作歌態度を觀て來る必要がある。今の人々は一の境から少なきも數首を、多きは十數首の歌をも作らうとするので、いきほひ一首一首の有つべき内容は貧弱になつて來る。その一つの境地を縦からも見れば、横からも見る。上からも見れば、下からも見る。斯うして一首に集約すべき内容を四つものにして見せようとするから、作るころの數が多ければ多いほど、一首にささげる苦心は軽くなり、従つて一首が擔ふところの内容も疎鬆になつてしまふのである。これは寫生或ひは現實主義の態度から導かれて來た餘弊であると思ねばならない。寫生は見えるところを見るままに作るのである。見えないところを想像したり推量したりしてはならぬといふやうな事を云つたものである。なるほどさうすれば縦から見たところと横から見たところでは一つの物でも異つて見える。その異るごとに一つの歌があること

になるのであるから、眼のつけどころさへ變へれば多數の歌が出來るのである。斯う云ふ拙いところへ頭を入れて、大局を見わたすことを知らなかつたのが過去十年間ばかりの俳歌壇の流行であつたのだ。それ故に物なり境なりを一つの全一の世界として觀ることを知らない。ただ一つの全一の世界の姿に於て、その物なり境なりを生かさうと思ふがために、山のやうな苦心が必要になつて來るのであるのに、彼れらはその一面を、或ひはその一角を、或ひは事象の推移を——映畫の如くうつりゆくその場面場面を——そのままに一首一首のうたに取り込んで寫し出さうとする。さうしてこの徒勞の作物の一聯を連作の名に於て呼んで來たのである。連作。この名のためにわが歌壇がいかに多くの冗漫と稀薄との拙き陥穽におち入りつつあつたかを省みなくてはならぬ。

しかし俳句の世界に於ては、以上の如き態度を比較的卒直な言葉の上に於て行つてゐたので、そのいはゆる寫生的態度といふものの弊も只輕淺と稀薄とにとどまつてゐたのであるが、短歌の世界では以上の如き態度を行ふ、極めて古風な萬葉調といふものを持つて來たのであるから、その弊の及ぶところは一層の深刻を伴つて來た。「庭」といへばよいところを「さ庭



「べ」といふ。「部屋」といへばよいところを「部屋ぬち」といふ「食べる」を「食す」「歩む」を「あよむ」などと云ふばかりではない。語と語との斡旋がまた極めて粘つたもので、さながら深い土泥のなかに、足を捕られたやうなものになり、はづかに足首の力で離すべきところを、腰の力——からだ全體を持ち廻らなければ、その足首一つを動かすことが出来ないやうなものになつて来る。斯う云ふことを或ひは全身力の集中と云つてゐるかも知れないが、全身力の集中と云ふやうなことはさう云ふ粘着するものではない。切つて離す力を伴はない力は力で無くて、他のものに引きずられるのである。しかもさう云ふ念入りの形が何物を最後に持ち來たすかと云へば、まことにたわいもない事で、要するに鬼面をにかけて人を脅やかす種類のものである。しかして斯う云ふ現實短歌がおち入つた陥穽は、かの俳句の冗漫と稀薄とに加ふるに迂遠と偏執と硬固とを以てして、極めて悪質の者となつて最近に及んだのである。萬葉調の名がいかにか歌壇の煩ひとなつたかは、後世、史を論ずるものの必らず見落してはならぬものである。(近く出づべき予の明治大正短歌史論は此の點に向つて多少の注意をそそいでゐる。)

その連作態度を棄てよ、而してさらにその萬葉調を抛れ。冬の日の第三卷に「まがきまで海

嘯の水にくづれゆく(荷分)」「佛喰うたる魚割きけり(芭蕉)」といふ附合がある。この佛などを寫生作歌の標準から説明すれば、佛像を喰つた魚と解するより外あるまい。しかもこれは死人を虚に設いたもので、佛像では無いのである。寫生にしたがへば斯う云ふところは「死入くうたる魚割きけり」とでも作るであらう。さうしてこの實感はと云はうとするであらう。彼れらはただその現實に執着して、現實の裏となるべき世界に眼が及ばないのである。

海くれて鴨の聲ほのかに白し

芭蕉

といへば、この短切なる一句に鴨の聲を中心として統一された全一の世界の姿がある。それは季感の鴨を中心として擴げられる生命の全幅的統一の世界と云つてもよい。一字もあることを必然とし、一語もその位置を動かすことの出来ない險要さに置かれてゐる。海は暮れたのに、その鴨の聲が白いといふのは、眼に見るべからざるものを耳に見たのである。しかも耳に見たものは鴨の聲の白さである。この「白い」といふ感じは、今まで凍るやうに光つてゐた海の夕べの空色である。その空の光りも暗く暮れはてて、ただ鴨の聲のみほのかにきこえるのである。芭蕉の直観は今まで見てゐた空の光りの白さを、鴨の聲音に於て感じてゐるのである。



此の感じの表はし方は全く「鴨の聲ほのかに白し」と云ふ形より外にはあり得ない。海空蒼茫としたなかに、鴨の聲のみほのかに暮れ残つたものの如くにきこえてゐる光景に面して、芭蕉の感動がいかに切迫したか、此の切迫が芭蕉の直観を開いて、その聲をも冬光の寒さの色であると見ようとしてゐる。この緊張のなかにこめられてゐる芭蕉の生命の全域的の充實を見なければならぬ。その充實はすなはちまたこの鴨を中心とする世界の内容の充實である。そこには寒い冬がある。またそこには光りから闇に變る海の色推移がある。「ほのかに白し」といふ言葉にはその聲のやや遠い沖邊にただ一つゐて鳴く姿が思はれる。之れ等複雑な外縁が芭蕉の直観に統一されて、その統一がそのままそつくり鴨の生命の内容として置かれる。この形を他の言葉で説明すれば、芭蕉の命の一瞬の流れ（一念の動き）が直ちに諸法の機に通じたとも云ふべきもので、此の諸法の機を宇宙の永遠への通路とすれば、一念の動きはすなはち宇宙三千の機を開いたものとなる。ここに宇宙の姿に於ける鴨の世界（小宇宙）がある。ただ一句の詩に労作をかたむけること此の域に至れば、作句の効は同時に禪機の効となる。

もし今の連作短歌もしくは寫生短歌をして芭蕉のこの句の境地に置いたとしたらばどうであ

らう。おそらくこの一句は彼れらをして五六首の歌を連ねさせるであらう。今迄明るかつた海が暮れたと云つて一首、暮れた海に何か鳴く聲がするあれは何だらうと云つて一首、あの鳴く聲は鴨であらうと云つてまた一首、鴨はさぞ冬の海が寒いだらうとここでまた一首、斯うしてそろそろと断片的に内容を稀薄にして行くのであるから、最も眼目とすべき「鴨の聲ほのかに白し」の切迫感にまで押しつめる主觀の重層の形を取ることの出来ないのは勿論である。それよりも第一に彼れらは「鴨の聲白し」といふやうな感じを虚偽の事として受け入れることの出來ないやうな科學的冷索の心に居つて詩を作らうとするのであるから、根本に於て行き方を異にしてゐるのである。それ故に鞭うつべきは、彼れらの此の冷索である。寫生も萬葉調も要するにその病ひを此の冷索から引いてゐる。（大正十三年三月）

## 解放と統一

すべての情慾を解放する形に於て藝術を行はうとするものと、その情慾を節制して或る主一



のものへ歸趨せしめようとする形に於て藝術を行ふものと、大體この二つの傾向に於て古來の傳統を分つことが出来る。

情慾解放の側に立つて云へば、すべての慾性をその赴くがままに趣かしめることによつて、人々の眞の面目をここに認めようとする。かう云ふ意味の面目を自然であり、自由を得たものであるとするところに、此の説の人間的勝味があると考へるのが解放論である。解放論はまた一種の自然主義とも云ふべく、自由主義とも云ふべく、この極度の解放の姿に於てはまた獸性的或ひは惡魔的とも成り得る可能性がある。戀愛至上主義、情死讚美論、唯美主義、藝術至上主義等が或る條件を附せざる限り、その傾向の由來を解放論に出發せしめてゐるのはもとより然るべきのことである。

情慾節制の側に立つて云へば、慾性を自己の全意識によつて統一しようとする。此の統一の形のうへに、慾性はそのみづからの位置を取り得るに過ぎない。解放はただ情慾の自恣的横行である。それゆゑに規範（標準）とするものがない。統一には規範を要する。この規範を宇宙の唯一なるものに置く。それゆゑに一個の人間の情慾が統制された形——意識統一の形——は

宇宙意識の統一の形となる。宇宙意識の統一の形にまで來てはじめて自由と云ひ、自然といふことが出来る。ここまで來ない程度の自由や自然はすべて擬へものである。今の世俗の自由や自然やが吾等の藝術の上に容易に受容されないのは、その根本に於て立つところを異にしてゐるからである。而して現在の政治乃至社會問題の騷擾が多く情慾解放の形に於て表現しつつある現状を見て、吾等の自由の名の汚がれつつあることを悲しまずにはゐられない。

人間の醜くさをその醜くさの姿のままに藝術の上に取り込んで來ることが、どの程度まで容さるることであるか、人間の暗面の別抉に就て、その事を興味としその事を悦樂としその事に生命の生長を感ずるといふならば、恐るべき病心理である。此の意味に於て懺悔と憐愍とを伴はない暗醜の別抉はことごとく罪惡である。かの科學に従ふものですらも、その冷靜の底にはこの世の深い者から動いて來る沈痛の涙が無ければならない。天災描寫の藝術などが、ただ慘酷の醜を描くにとどまるならば、その罪はかの冷素なる科學者にもまして鞭うたるべきものである。之れ藝術は人心を暴することに於て科學以上の力を有するからである。（大正十三年二月



## 大震記念篇序

今の時代には無用の刺激があまりに多いために、感覚はそのために浪費させられていきほひ有用なる記憶を維持するに困難ならしめられる傾きがある。今のやうな時勢に處して轉々流浮する世相の中から、不易なるものゝ生命を攝取することは拔群の偉人でなければ克くし得ないところであらう。人はよく現代人の健忘性をいふのであるが、健忘ならざればあり得ない原因に就ては多く云ふところが無い。こゝろみに吾等をして、街上に立たしめよ。そこには文明をよそへることごとしきものゝ刺激が充滿してゐる。斯かる刺激の大半は無用で無ければ有害なるものゝそれである。さらに去つて書齋に入らしめよ。こゝにはさらにより多くの無用なる刺激が印刷術の便宜によそはれて、不斷に覆面の醜を齎らしつゝあるに驚くであらう。靜かに我れを保たうとするものに、之等の刺激は避けらるべきものゝ如くして、實は避けられないのが人情の常である。世を経するほどの者は、先づこの事に苛察なる眼を向けなければならぬ。

世をまつりごつものゝ儉約といふことも、纔かに物の費を省くにとゞまるならば、味氣なきことである。今の時世をその感覺の氾濫から救ひあげるのは、そもそも何人の務めとすべきであらう。世に阿るやうなまつりごとならば、查公走卒といへども爲すを難しとしない、群動のなかに孤行して隻手を以て山流を支へるやうな人の出現を待つのは遂に空想たるに過ぎないであらうか。先進は先進らしく、老年は老年らしく、その歳霜の威を把つてかの青弱を震肅すべきであるのに、彼れ等はただ身をやつして、市井の劣惡に阿る事を恥ぢとしない。大震の脅威は怖るべきであるが、また必ずしも意味なきものでは無い。(大正十三年九月)

## 初心者へ

此の頃或る一部の人の歌は、微密なところへ這入つて行つてかなりの苦勞をしてゐるのがありと見える。だんだん歌の道を分け入ると、手がこまかにこんで来る。さうして動きの出来ないやうなところへ這入つて行く。粉骨の場といふのがそこである。そこをおし切ると、ま



たしばらくらくになつて来る。作者がその場を占め得たのである。しかしまた暫くにして手が込んで来るところへ出る。新なる粉骨の場である。そこを押し切れれば言ふことは無いが、なかなかおし切れない。はたと行きづまりを感じてしばらく手も足も出ないやうになる。これは進歩するものゝ上には當然来なければならぬ困惑である。たゞそこを押切るか否かが問題であるが、どうしても押し切れないことがある。さう云ふ時に新なる力を與へるものは、すこしく後を振りかへる心になることである。一息入れる心持で、今まで来た道をやゝ後へ戻るのである。さうしてもう一度らくな歌ひ方をするのである。之れを歌はうとするものゝ上に就て云へば、ごく素直な平坦な見方でその物に對する心もちである。さうすると行詰つて歌へなかつたものが歌へて来る。或ひは飽き足らないやうに思へるかも知れぬが、その歌の中には、もう今迄に出し得なかつたものが出てゐるのである。一方ばかり攻めてゐると、氣が疲れるのである。氣を替へて他の方から攻めると、力を新にするからである。精進の心が専らであるとうどう方角を變へても力の現はれぬといふことはない。即ち後へ戻る心と云ふのは後へ戻るのではないことが分かる。これを消息としてあらためて諸君の精進の前に送らうと思ふ。

○

初心のものが容易に先進の者の手をまねるのは地こしらへの苦勞を疎漫にする傾がある。初心のものとはたゞもつばら自然に素直であることを心懸ければよい。素直であるとは赤いものは赤く白いものは白く見える心である。ありのままに歌へといふほどの心である。それから少し進んだらば、その物に添つて出てくる心もちを歌ふ。この心もちの素直であるべきことはいふまでも無い。二三年斯ういふところの地をたがやして、それから質の上のことである。造化の心、物の愛、世の寂しさ、みなこの質のことである。この境に来て、その人の平生の讀書や、思索や、修養が色となり匂ひとなつて歌の上に表はれてくる。わが社中の人にはふだんに此の事に思ひをかけてゐなければ、十年の歩を隔つることになつてしまふ。しかし、さう云ふ讀書や思索によつて得たものをすぐ作歌時の意識として働かしてはさんさんである。それは平生の修養である。作歌時にはその事に無心でなければならぬ。それら修養の果が歌のなかへにじみ出るのである。芭蕉が心を養ふは平生の用意である。句作時には全く無分別になれ、と教へたのもそこである。(大正十三年八月)



## 俳諧禪、短歌禪

今の歌人の一部に連句のことが分かりつゝあることはよろこばしいことである。連句が一句立ちのうへに於て、複雑な味を持つてゐるものであることは云ふまでも無く、前句の關係に於て、その味ひを一層豊富にして來るところなど、このものに親しめば親しむほど、芭蕉の到り着いた詩の境のたゞたゞおどろくべきものであることが分かるのである。紀記萬葉の粗曠に創まつた日本の詩が幾世紀の苦楚を経て、こゝまで來たことを思ふと、人の心の——その感觸の世界の、微細なる進化に一種の怖れを感じしめられる。連句の世界に於ての眼も、耳も、鼻も、皮膚も、凡て叡敏なる佛、菩薩が有する感觸のそれである。聲無きに聲をきゝ色無きに色を見る。芭蕉の俳諧國はこの意味に於て全く不可思議の神秘世界と云ふべきである。

かうして連句の試作をしてゐる間に言葉の連続の不可思議を知ることが、また同時に人の心の不可思議を知ることである。暗示から暗示へ、俳諧は全く一種の禪問答の如きものである。

蕉門の諸子はこれを呼ぶに俳諧禪といふ名を以てしてゐる。俳諧禪から、短歌禪へ、世法禪へ、芭蕉の俳諧の世界を取つて、之れを今の吾等の生活の上に持ち來すことは、素貧なる我等の生活をその意味に於て豊富ならしめることである。山に萱刈をしながら『雪ちるや穗屋のすゝきの刈りのこし』の心を味ふことが出來たらば——、一椀の麥飯を啜りながら『白露のさびしき味を忘るゝな』の心を味ふことが出來たらば——、その人はその貧寒に居りながら、豊富に充たされたのである。俳諧も歌も詩も、さういふ素貧に居つて、心の充足を味ふことである。それゆゑに寂しい道である。寂しさに足ることを知る人々にのみ與へられた天の恵みである。

或る人が來て、近頃の小説などにも心ある作家の物には、さう云ふ充足の寂しさを眼がけてゐるものがちよよいちよい眼につくやうになつたと云つてゐる。それはよいことであると思ふ。歌や俳諧に三十年あまりの生涯を盡くして來た人たちは、三四年で世の流行作家になる小説家よりはずつと精神の苦楚を嘗めてゐることを思はねばならない。歌や俳諧が小説の後を追つてゐるといふやうな言葉を臆面も無く言つてゐるのは恥づべきことである。(大正十三年十月)



## 俳諧の季

芭蕉の俳句や連句にしたしむやうになつて、ことに季節といふものが懐かしくなつて来た。歌だけにしたしんでゐたころは、やゝ典型の美であつた自然が、徐々に翻ぐされた味を持つて觸れて来るやうになつた。さうしてこの事から日本に生まれ、住み暮らし、老いゆくことまでも懐かしまれるやうな感じになつて来る。それは俳句や連句がさうさせるので無く、芭蕉がさうさせるのであらう。私などはもう何十年の間、人麿や赤人のものを讀み、業平貫之のものを讀み、俊成定家西行宗祇のものを愛して来て、そこに忘られないものを遺して来てゐるのであるが、しかし一度び芭蕉のものに接しては、それらの古歌人のものが何としても心に遠いものゝやうに思へてならないのである。もし舊境を脱却するといふことを言ふならば、此の場合のこの心持はまさしくそれであらうと思はれる。

しぐるゝや田のあら株のくろむほど

かう云ふ句に接した百姓の人たちはどんなよろこびを感じることであらう、卒直に端的に季節の味が心にしみて来るのを禁じがたいであらう。さうして此の味ひが百姓の人たちの生活の全面ににじんで行く、新俵を積みあげた土間などの有様から、落松葉を焚く燃火の明り、そこに大根の煮凝りの煮える爐ばたなどまで、すべて取りあつめた農家の景色が浮んで来る。あれ、木枯、落葉、初雪、さういふ季節のものが、もう全く生活と組み合つて、どうにも動かすことの出来ないものとなつてゐるのが俳諧に於ける季節の感ではないだらうか。惠比須講といふ一語にさへも初冬の一切の人事と自然との味ががもされてゐるやうに思はれる。俳諧に於ける季節はそれゆゑに當然象徴といふことに連絡をもつてゐる。俳諧に終始してゐるものが。この事に風馬牛であることは大きな怠慢であるとも云へる。しかして吾等の短歌は一方それらの怠慢を眼ざめさせながら、あらたにこの事を吾等の眼ざめとしなければならぬ。

秋雨の伯母が板屋のつれづれは粉石臼をひくに  
ありけり

張りかへてみぎりの石の濡るゝほど朝しぐれふ

俳諧の季



障子の明り

まだ覺束ないながら吾等はやうやくこゝまで歩いて來た。大正十三年十一月)

## 正月の言葉

門松が装はれ、注連が飾られ、鏡餅が白い紙のうへに据ゑられ、海老、昆布、橙、ゆづり葉などが、古風な趣向に仕立てられて、床の間、神棚などに掛けられて來ると、もういつのまにか、正月はそこいらに來てゐるやうな心持がされる。門前の道は、冬の日さしがふつくりと今朝の霜をゆるめて、すこし泥になつたうへに短かい陽炎の揺れてゐるのさへ懐かしいものである。雪がふれば、ふることをよろこびにし、晴れであれば、晴れであることを悦びにして、正月の心を思ふ存分豊かなものにして味はうとするのは、たゞ子供たちばかりの事では無い。若いものは云ふまでも無く。中年者も、老いたものも、正月といふ聲をきくと、不思議にもかたくな胸を開いて、出來るだけ正月の光りを多く心に取り込まうとする。故人は三月の花を待つよろこびを、佳人に會ふ心持にたとへてゐるが、正月を待つよろこびとても、それに劣らう

とは思へない。

もし文化といふことを云ふならば、日本の正月ほどその意味にふさはしいものは無い。しかし文化といふことが生活に於ける科學の利用の名に於て呼ばなければならぬならば、日本の傳統に見る正月は、これほど非文化的のものはないといへるだらう『元日や神代のことと思はるゝ』と云ひ、『元朝の見るものにせん富士の山』或ひは『蓬萊にきかばや伊勢の初日より』といふおそらく斯う云ふ非合理的な感性の詠嘆は、それらの文化人からは不要なものとして一蹴されるにちがひ無いのである。私は文化といふことを生活に於ける風雅の交渉と解し度い。この意味に従ふとき、日本の傳統に於ける節句、正月などの行事の尊貴を思はずにゐられないのである。二月の節分、三月の彼岸。五月の菖蒲。四季をりをりの生物と人との交渉が、すべて風雅を媒として、しかも風雅の眞髓の愛(化育)にまで入り込んでゐるのを面白くおもふ。日本人は風雅から這入つて、不知不識の間に自然の命に觸れ、さらにこの事によつて暗黙の裡に宇宙の道を體するのである。よき日本人はよき日本人であるほど、この事に深い心を傾けるやうに思へる。律義な大工左官などが、その日常の用具、たとへば鑿、鉋といふやうな物にも、



しめ縄を装ひ齋<sup>まじ</sup>めの紙を附けてゐるのを見て、こゝにこそ正月の文化、(風雅)のあることを思はずにはゐられない。父母といふ稱呼さへも厭忌して、西洋風のパムと云ひママと呼ぶ日本人が日一日と増加してゆく今の時、かう云ふ正月の讃をかく私は、餘程の間ぬけであるかも知れない。しかし門松が飾られず、鏡餅がそなへられぬやうな日本の明日を思ふと寂しくてたへられないやうな氣がする。(大正十三年十二月)

## 吾が門の歌

斷崖<sup>きりぞ</sup>ゆ水したよりて舟寄せしわが裸身の栗だつ  
おぼゆ

日の光水にとほりて水底の砂にゐる魚の黒くも  
ぞ見ゆ

湖尻はゆく水迅し底砂利にわが漕ぐ舟はさやり  
軋むも

月を脊に戸をたゞきけり我がかげは板戸の面に  
黒くうつるも

大正六年ごろの作を小田観瑩の「隠り沼」から引いて見る。どの歌にも作者のむくやかな性情と、その中に要領を得た着眼が見えて、悪い氣持のするものでは無いが、今の潮音の立つと



ころから見かへると、遙かに遠いところに隔つて見える。しかし現在の歌壇の大衆はまだ此の邊のところに汗をしぼつてゐるのである。一の歌の「わが裸身」を「わが肉群しむら」とし、二の歌の「黒くもぞ見ゆ」を「頭むれて見ゆ」とでもして、その部分だけを畸異な形の字餘りにして見せるやうなのが、ついこのごろの歌壇であつたことを思ふと、いよいよ興味が多くなるのである。さすがに小田君はさういふ種類の事をせず、心を穩當にして歌つてゐるので、寫生歌ではあるが、氣持のよいものになつてゐるのである。

その眉目かすかに動き眠りたる面輪はつぐる絶

えぬ痛さを

貧しかる家にとつきし身を悔いてゐずやと思ふ

薬もとれず

その母の乳をしたひて叫なび泣く吾子を抱きて吾

も泣かんとす

泣きつかれ疊に臥して眠りたるあどけなき子に

何も罪なし

大正八年ごろの作を故増田大作の「寒菊」から抄出したのである。病妻の連作である。小田君にも此の種のよい作が遺されてゐ、「野元正彦集」にもこの類の沈痛に入つたものを遺してゐる。現今歌壇では斯う云ふ種類のを主觀歌と名づけて、この傾きのやうなところへ眼をつけてゐる人が、可なり多くあるやうであるが、潮音は其ところを少くも六年前位に經由してしまつたのである。萬葉集の人情歌といふものが、此の傾きの源流であることは云ふまでも無い。しかし藝がその邊に止とまつてゐると俗情には投ずるのであるが、心の深さとか、汎はんかさとかいふものには随分遠いものであるといふことになる。増田君のこの作は、さう云ふ立ち場として、多く肯定されるものを作つてゐたので、其の當時に於ては人の心を打つものがあつたのである。潮音の門徒は汗に溢れてゐた。大正十年ごろにはもうすつと異つたところへ這入つてゐた。



をさな子を叱りてけふの夜はみじかししば鳴く

鳥はほととぎすかも

わらはべは夜具ふみぬぎていく度ぞ軒の雨だれ

音しづかなり

をさな子の寝息しづけし愛しみつる螢あかるむ

その枕べに

雨やみてかすかにそよぐ若かへで梢はいまだつ

ゆをもちつゝ

静かなる日の光かも野の草はかさなりあひてう

ら枯れにけり

「藤の實」の大正十年の春の作である。そのころの歌壇にはまだこのやうな静謐に心を置いてゐるものは無かつたのである。たつた一人の作者が物の微趣に眼を注いでゐたやうではあるが、まだこの種の静かなる生命の移りに這入つてはゐなかつたのである。潮音はこの前後に於

てかう云ふ粉骨の山をこえるためにすべてが息をひそめてゐた。潮音の門徒に「この道やゆく人なしに秋のくれ」、「此の年は何で年寄る雲に鳥」などの、芭蕉の味の分りかけてきたのも、この前後である。翻つて歌壇の大衆を睹ると、こゝには寫生歌が其の形象の畸癖を一層昂進させた跡を見せてゐた。枯原に石の頭が出てゐて、それへ尻を卸したとか、薬をもち乍ら坂道？の半ばで息がきれたとか、さういふ系統のものが間の延びた言葉で綴られたのを思ひ起すのである。

雪山に入り陽の名残りほつかりと遠き沼尻ぬじりの村  
を照らせる

大沼の蘆間の水に日のかげのさしこみてゐて鳩  
の啼く聲

水底にとほる日のかげ尊菜のとろとろとして冬  
を生きをり



日もさむく風にしわぐむ沼ぬまの面おもてに浮きぬし鳩の  
つとかくろへる

これは野澤柿葺の新年號「古沼」のなかの四首である。柿葺の歌は昨年の下半期になつて、従来の堅い詠み口から、柔かく含みをもつたものゝ方へ移動して來てゐる。以前には石垣の目を數へるやうに事實の隅から隅まで精叙するといふ風であつた。それが心持をすつとゆるやかにして、事實を抱擁するところへ來てゐる。事實に迫る眼力、事實を凌ぐ（穿つ）心力を刻明に養つて來た彼れが、あらたに抱擁のこゝろを知るに至つたものとして、この四首の如きはあだかも石垣の目が青い苔を吹いて來たやうな位を持つてゐる。第一の「ほつかりと」が「照らせる」に應ずる感じは、可なりまでの發展を遂げてゐる。こゝに「雪山」の感じがひゞいて來て、沼尻の冬枯の景をほつかりとひろげて來るのである。第二の歌では「さしこみて」の強みが、「鳩の啼く聲」をひゞかしてゐる。この邊にこの作者の地ちが見えて、十年の苦心のおろそかならぬ事を知るのである。それが次ぎの水底の歌になると全體的に一層よいものとなつて表

はれてゐる。四の歌の「しわぐむ」もその心である。強みをたゞ強さとして表はしてゆくのは凡庸の手でも出来る。強さがうま味を持つて來るやうにならねばならない。それには迫る凌ぐ以上の或る心法の世界を會得する必要がある。近頃の柿葺にはそこが分かつて來たやうに思はれる。

いかばかりかゝる今宵の月影を立ちわかかれての  
後にしのばん  
木枯のやみて音なく冴ゆる夜の月におもひをつ  
くすなりけり  
雪のうへにかつ積む雪のあけくれのあはれに居  
りて暮るゝ年かな  
もみぢ葉を搔きても見ばや水底にこよひの月の  
影はすむやと



これは米倉久子の新年號の作である。此の作者がまだ甲斐の生家にゐる時分はことに目立つた特色もなかつたのであるが、北海道の小田君へ嫁してからは、夫君と與に西行の精神の探求に苦勞されたいしい跡を示して來た。それは一つには北海道の邊僻の寂寞がその心を襲つて、殆んどゐたゞまらない程の境に押し込められたので、その險しい體驗のなかからあらたに生きるべき道を得て來たのが、之れ等の歌の精神となつたものと思ふ。ゆるやかに舒べられてゆく言葉は、些かの急切なところが無く、すべて潤ひを持つて、たしかな呼吸をはこんでゐる。手當り次第に事實を歌にしてゆくといふやうな匆卒さとはちがつてゐる。一首一首には末擴がりに擴がつて行く背後の世界がある。この世界の色は、白い青いといふやうな清明な感じとはちがつて、やゝ深い秋霧に掩はれた月夜の微光とも云ひ度いものである。輕快と纖美はこの作者の持ち物ではない。曲と轉じ、節と撓むといふ離れ業も此の作者のことでは無い。しかし地歌では無い。潮音には斯う云ふ歌の系統が三四分の程度にある。これは良寛や西行の追慕から來たものといふのが適當であらう。

八方に雪山ひかり立ちそびゆ手鼻をかめる麥晶  
の人

野の中のはたけの稼ぎ疲れたり松山に鳴ける大

鴉かも

山々の光りとがりて冬ふくる薪山まきやましぐれまた晴  
れにけり

山崎等の二月號の作である。このうたには山崎の直觀が、——山崎で無ければ出すことの出來ない咄嗟の閃きが出てゐる。山崎の歌は素つ氣ない、人がよいと言はうが悪いと云はうが構ふものかといふやうなところがある。八方に雪山の光りを聳えさせて置いて、その中の麥晶の人に手鼻をかませてゐる。この人は多分片手には肥柄杓を持つてゐたであらう。さう云ふところをぐんぐん歌の中へ取り入れてそれで少しも皮肉のわざとらしさを感じさせぬところに、一茶とは通じながらも、一茶のやうな繼子風と異つたところがある。山崎の歌が譏刺骨を徹すといふやうなところへ行きさうで行かぬのは、その性の善良と、その境遇のめぐみとによるもので



あらう。この歌の「松山に鳴ける大鴉かも」もすい分人を馬鹿にした大鴉である。一茶ならばこの鴉をもつと痛切に皮肉なものにひどかすのであるが、山崎の主観はそこ迄意地わるく揉み込まない。正面から卒直に這入つて行かうとするところに、その性の純樸がある。

消えてゆく山の灯に鳴く山鳥の聲をかすかに雪  
のふりつゝ

刈萱は親子地藏の灯もきえて闇夜の風に枝の泣  
く聲

枯れ果てゝまよふ蝶々のすがれ菊この萱寺の石  
段の道

住めばよき山の小家ぞ湯豆腐に酌む夜の月は清  
く澄みたり

これは伊藤豊の年刊歌集に出したものと抄出である一の歌は山家の雪の曙である。そこには

しのゝめの光りに消えてゆく山の灯がある。山鳥の啼く聲がきこえる。雪がかすかに降つてゐる。それらの景はすべて眼前のものであつて、どれも修辭の便から不要な物を假りて來たのは無い。かういふ取り集めたしのゝめの景物の中から醸される薄明の情致に浸らうとするのが、此の作の動機である。一つ一つの物の齎らす印象の鮮明といふ事などを覗つてゐるのでは無い。むしろそこを却けて或る景觀から湧きあがる風韻の匂ひに酔はうとするものである。蕉門で云へば伊賀衆の「あだなる姿」といふのがこゝである。「うぐひすの鳴いて見たれば鳴かれたか」「鶯の舌にのせてや花の露」などがそれである。峻烈に物の印象に迫るといふやうな處ばかりが詩では無い。物の情に乗つて、乗り惚けるのも詩である。潮音にこの系統のものゝあることを予はほこりとするものである。第二の「枝の泣く聲」などが、寫生系統の作者に了解出來ないのは、もとよりそのところである。

この作者にはなほ次ぎの二首の如きがある。

ひさびさにふる夜の雨ぞ手をうちてよころびを

いふ草木とわれと

吾が門の歌



雨ふれば草の藪より這ひいで、よろこぶ墓の顔  
を見にけり

その當時歌壇の大衆は、この歌の趣意とするところなどからは、大へん離れたところに居つて、手をあげて呼ばうにも聲が届かない状態であつた。

蛙一つ鳴くやまぶしき晝空ひるぞらに光はみちて雨をこ  
ぼしぬ

ひる空の光り明るく蒲公英の花にこぼるゝしろ  
き雨かな

桑原はそろふ芽ぶきのうつくしく夕日の靄のに  
ほひ立ちけり

この國の若葉しづかに明けくればまたたのまる

るけふの光りなり

竹やぶのかけも明るくうぐひすの聲とほるなり

崖下の道

大井廣の大正十二年五月の作である。こゝへ來ると、現今の流行歌の「うつしみの命の」何々といふやうなまなましいものとの距離が、餘程大きくなつて來るのである。大正十年以後の吾が社中の精進はかゝつてこゝにあつたので、その一途なる轉歩は、他門の漫罵の言葉などを振り向いて見る餘裕も莫かつたのである。小田君の心が新古今、西行などの留意から動きはじめて、柔かいところへ出るやうになり、物の内面の感じへ移つて來たのもこの期間であつたらう。斯う云ふ傾きは單に社内の機運の移動となつたばかりでなく、年を越えて十三年になつてはこの影響は明らかに歌壇の波紋となつた、しかし歌壇が吾等の影響を受けるに従つて、却つて吾等を漫罵する聲を高めて來るやうな奇觀を呈した。

澤いで、河は氷の枯野なり鳥落ちて光空に消え

吾が門の歌



たる

霜ぐもり朝々ふかし日に濡れて小葉の豌豆紅ふ  
くみつゝ

白菖蒲しろあやめいまだ蕾を巻いてゐて盪は繭をつくりた  
るなり

茱萸の實の紅ふかき朝つゆに翅ぬらしゐる蛾の  
眠かな

白き蛾の眠はふかし芍薬の苔ほどくる空しのゝ  
めや

大正十三年（昨年）に潮音の先登はこゝまで攀ぢて來た、こゝには白刃の切つ尖きから騰る  
凄光の漂ひとも云ふべきものがある。今の歌壇の何人がこの境を領解し得るであらう。潮音は  
こゝへ來て、切れ字の休止の意味を知るに至つた。「鳥落ちて光り空に消えたる」といふやうな  
錯落の趣に面して當惑するのも、白菖蒲の蕾と蠶の繭とを象徴の義に於て味ひ得ぬのも、この

休止の眞趣を解する能はざる人々の妄蔽である。今、潮音の浴びてゐる漫罵はこの意味に於て  
吾等の矜恃を高めるものであることを思ふ。これは宮崎茂の作である。（大正十三年十二月）



## 芭蕉、蕪村、子規、

海暮れて鴨の鳴く聲きこゆなり

かう云ふ形の發句があるとす。一つの景觀には相違ないが、たゞありの儘を言ひとつただけの形であつて、高級なる詩としての發句とは云ひがたいものである。芭蕉は斯う云ふ程度のものを地句と云つて嚴に發句としての資格を有たないものであると斷はつてゐる。

海暮れて鴨の鳴く聲ほのかなり

この形にまで來ると、やゝ微か乍ら、主觀が動いて來てゐる。前の形に於ける主觀の姿をたとへば平地——靜止——の状態とすれば、此の形に於ける「ほのかなり」といふ座五は、その平地が多少揺れ動いて、起伏の力をあらはさうとして來てゐることが感じられるのである。しかしながら、その動揺は動揺と云ふに足らないほどのものであつて、この程度ではまだ地句の範圍に置かるべきものである。

海くらく鴨の聲ほのかに暮れのこる

さらにこの形まで來ると、座五の「暮れのこる」に主觀の動いた痕跡が可なりふかくあらはれて來るのである。主觀が能動の力を盛りあげて——その對象の「鴨の聲」の方へ進出して、之を主觀の内なる者としようとする意向が受けとられるのであるが、「暮れのこる」の言葉に、なほ意識（反省）がはたらいてゐるところがある。しかしこの程度にすれば句は一節を具へたので、初めの地句の形とは餘程ちがつたものとなつて、發句らしい位をそなへて來てゐる。芭蕉が發句には少くも一節を具へなければならぬといふのも、この程度のもを指すのではないかとおもはれる。

海暮れて鴨の聲ほのかに曰し

ここへ來て、はじめて發句の位を完全に具備して來る。主觀はその能動の力を極盡して、對

芭蕉、蕪村、子規



象を完全に自分のものとしてしまった。この形を前の言葉で云ひあらはせば、鴨の聲はその客観の位置を空にして主観として現前したのである。「ほのかに白し」は主観が、鴨の聲をあらたに我が物と爲し得たその瞬間のよろこびの躍りとも云ふべきものである。この場合もし鴨の聲と主観との間に分厘の間隔でも置かれたとしたならば、この「ほのかに白し」といふ超意識的の言葉は流露しないであらうと思はれる。斯う云ふ主客融合の刹那に於ける室廓の心持を、私は純粹意識と呼び度い。芭蕉が此の句をこの形にするために、以上のやうな数段の心の経路を取つたか否やといふことはこゝで問ふ必要は無い。たゞこの場合の如き情景も、これに對する心力の相違に依つて、以上の如き幾段階かの作物の相違を來すものであることを證據立て得ればと思ふのである。

この句の座五にこの「ほのかに白し」と据ゑたことによつて、「海暮れて鴨の聲」といふ五、七の二句までも生氣をあらはして來る。たとへば水の一部分が起伏の状態を呈したために他の平靜なる部分迄も、波瀾のなかのものとなる如きものである。「ほのかに白し」はまことに龍體が眼を開いた如きもので、この一語のために全體がいのちの活きと光りとを取つてかが

やいて來る。芭蕉が作句上の曲といふのがこれである。こゝになると句は節をそなへ、曲をそなへて來たので、この程度まで來なければ發句たる資格が無いといふのが芭蕉の意見である。それゆゑに芭蕉は曲節を具へたいはゆる發句と、しからざる句すなはち地句との差別を嚴密に差別してをりふし門人を戒めてゐるのを見るのである。地句とは主観のはたらきが思量世界にとゞまる場合の句か、主観が動いても虚（純粹意識）に入らない程度の句かである。芭蕉の發句集をしらべて、その天和貞享の交以後のものを見て來る。どの句と云へども一節をそなへるか、一節一曲を併せ具へるか、いづれかで無いものは無い。

唐崎の松は春の夜霞みけり

では、地句であつて發句たる資格は無いが、

唐崎の松は春の夜隴にて

といふ云へば「隴にて」のはたらきで一節ひとしをそなへて來る

唐崎の松は花より隴にて

芭蕉、燕村、子規



となれば、「春の夜」に停廻してゐた心が、たとへば水のはけ口を得て流れ出づるが如き姿をもつて、「花より」の飛躍を作つて来る。主観が対象の生命の在處を探りあてたそのよろこびに踴躍したので、心の曲とはこれを云ふのである、この刹那の心持を形容すれば、分別の案を乗りこえて心の虚空に臨んだので、こゝへ来れば感覺はその局部的特立の頭を消してすべてのごとく主観の中に吞吐される。斯う云ふ主観は身心を脱落し、内外を空了し、感覺の本末を混一した形であつて、芭蕉の「虚」といふものがまさにこれである。

今の俳句といふもの、今の短歌といふものは、すべて地句、地歌である。言葉をかへて言へばすべて分別の成果である。しかもこの弊の發端は正岡子規の寫生句寫生歌に胚胎してゐる。彼れは芭蕉の「あら海や佐渡によこたふ天の川」をたゞ豪壯であると評したほどの眼をそなへてゐたに過ぎない。荒海と云ひ、天の川といふ、形の大に眼を奪はれて「よこたふ」のしを知ることが出来なかつたのである。それゆゑに彼れは「瓶にさす藤の花房みじかければ、疊のうへにとどかさざりけり」の思量世界、局限世界、差別世界に止住しなければならなかつたの

である。今の寫生派の人は寫生といふ概念を種々に造爲して、傳神とか氣韻とか、靈とか云ふものを包容せしめようとしてゐるが、しかし子規のかゝる思量の歌を神興として禮拜してゐるのであるから、その概ねを知ることが出来る。彼れ等は、彼れ等に於ける寫生の概念がすでに意外のところに移動してゐるにかかはらず、今なほ寫生の名に拘泥して之れを脱却することが出来ないのは、子規の神興を捨て兼ねる未練心のためであらう。もし子規が存命してゐたならば、あのやうな啓蒙思想を疾くに擺脫してゐたに相違無い。さうしてその寫生説などはいさぎよく棄捨してしまつたに相違無いと思はれるふしがある。子規を繼ぐものは子規を生長せしめなければならぬ、子規を繼ぐものが、子規の唱へた意味とは全く異つたところへその寫生説を歪めてしまひ、しかもその作るところの歌俳句は依然子規の埒内のものであつて、いささかの進歩も成長も無いとすれば、彼れ等は故人に對して二重の罪を侵してゐるのである。子規をして此の状を見させたらば、之れを何といふであらう。

子規の神興はもう棄捨すべき時になつてゐる。この事は子規の作品を詳細に研究することに



よつて明らかめらるべきことである。子規の研究が今のやうな時に起こらないといふのは何故であるか、子規の病床のあり様、その閱歴などは研究するとしてはあまりに知れ渡つてゐることである。さういふことは神輿の尊嚴を流俗の上に傳ふることとしては大切であるかも知れない。それらの事よりも直ちに子規の作品を取つて、その價値の批判を試みるべきである。而してこの事は彼れの俳句と和歌との比較研究から先づ端緒をひらかねければならない。子規は一方に蕪村を提唱し、一方に萬葉集を奨説し、貫くに寫生といふことを以てした。そこで問題となることは蕪村と萬葉に於て果して寫生といふことは妥當であるべきか、否やである。さらに蕪村と萬葉とは共通點ありや否や、ありとすれば如何なる形に於てか、無いとすれば如何なる形に於てか、しかもこの事は轉じて對芭蕉の問題にまで發展する。芭蕉と蕪村との比較、芭蕉と萬葉との比較はそれである。子規を紹述するものは當然爰に來なければならぬのに、子規の病苦、その生ひ立ちなどに二十年餘りの道草を食べて、たえてその精神闡明の上に進歩を見ないと云ふのは何故であるか、子規を尊むものは俳人と歌人とに論なく、蕪村を問題の主點に置かなければならない。蕪村は子規の子規たる所以であつて、その萬葉見解といへども、殆んど

蕪村觀の立場から觀られて居つたのであることを思ふと、子規の眼に見られた萬葉は極めて歪められた萬葉であることが知られる。このことは萬葉を寫生の概念の中に取り入れたことによつて明瞭である。萬葉のなかには寫生歌らしいものもないではないが、それはあらゆる文藝に寫生手法のある如き程度のものである。萬葉集を以て寫生歌の標準の如く取り扱つたところに子規の大きな過ちがあり、後の子規を紹ぐものの盲目がある。

萬葉は文藝開眼期に見る——いづれの國の文藝史にも見られるところの——發生期的の豐富さを持つた歌謡集である。こゝにはあらゆる分化を可能ならしめる萌芽をひそめてゐる意味に於て、これはまたあらゆる風體の源流であるといふことが出来る。之れを局限的、思量的、差別的の嫌ひある「寫生」といふやうな躑躅の名の下に押し込んで、之れをいびつなものにしてしまはうとするのは冒瀆の罪を免れぬことである。子規に面しようとするものは蕪村を見なければならぬ。蕪村を通じて子規を見れば、子規は正しい面を向けて來る。子規を通じて萬葉集を見れば、萬葉は歪んだ者になつて來る。それ故に萬葉を正視しようとするならば子規の埒



外に出なければならぬ。子規を正視しようとするならば蕪村に就かなければならぬ。子規の神輿を尊しとするものが蕪村を輕蔑するのは子規への冒瀆であることを思はねばならぬ。蕪村研究に就ては嘗てホトトギスの論講を興味多く見た。今の子規系統の諸信者によつてさらに新なる傳神、大虚、靈、氣韻等のことを、蕪村句集の何處に適用するかを見るのは吾等にとつて望外のよろこびでなければならぬ。

萬葉の寂寥感はいが、西行の寂寥感は氣に喰はぬといふものがあらば、さらに西行の寂寥感に氣に喰はないが、芭蕉の寂寥感は好きであるといふものがあるならば、その偏執はむしろ笑ふべきである。心がこの世の寂寥にもつばらに向つてゐるならば、萬葉の寂寥感よりも西行の寂寞がはるかに、此の世の實相に近づいて居り、さらに芭蕉のそれは一層その實相に近づいて居るものであることをよろこびとしなければならぬ。萬葉の寂寞は哀感の一相としての無常觀であるが故に、彼れ等はその時々都合によつて、無常觀から直ちに有常觀へ、さらに快樂觀へ移動することの出来る程度のものである。西行へ來ると寂寞はかれの宇宙と人生とに於

ける視點の要である。如何なる場合にも跟いてまはる影の如きものである。西行は脈ふが芭蕉は好む、蕪村は輕んずるが子規は尊いといふやうな辻褄の合はぬ事を説いて、自らの心を歪め、ひいて流俗をあやまるのが今の歌人であらうか。(大正十四年一月)



## 太 虚 集

島木赤彦氏の大正九年以後の歌の集である。氏の歌は今の流行の中心をつくつてゐる趣があるから、その批判と雖もその傾きに於て正平を失ふものが多く、従つて著者を憤せしむる者が無いのを遺憾とする。予の見たるところを以てすれば、著者は今や世の俗情の囚れとならうとしてゐる。而して予は之れを著者の責任とするものである。著者の言動は理を通ぜしむるところが無くして、氣をあらがはしむるところがある。近年はそれを一つの術として、やゝ自得するところが見受けられる。知らずして此の術に陥るもの、知つて之に迎合するもの、共に究極に於て、著者の心境の煩累となるものである。著者がこの俗情の域を越えて、世俗の上に無手となり、併せて例の争氣を抛擲して立つ時、著者の藝は初めて、萬有の通理に眼を開くのを必要を知るであらう。著者は世俗に恃むところを得た爲めに、今や藝道の心を殆んど空乏にしてゐる。大正九年度の作にはづかに形を爲してゐるものがあるのみで、十年度、十一年度は全く體を失つてゐるのである。十二年から十三年度に至つては、前進する勇氣を失つて、辛うじて

「氷魚」の反蕪をしてゐる。著者の作物には蒼潤が無い。之れ彼れの歌が多年の鉗槌を浴びながら、つひに固屈を脱する能はざるゆゑんである。現代人心の燥と偏とを反映するものとして、著者の歌はおそらく後代の厳しき裁きを受けるであらう。その内容が實と物質と形似とに終始して、凡て意識の捏ねあげに終つてゐる。斯う云ふものへ太虚集の名を掲げるのは功を一夜に築かうとするもので、著者の術がしばしばかゝる危ふいところを見せるのは惜しむべきである。以上の評言を取へて著者に消める。著者はおそらく此の言に憤悱しないであらう。憤悱しなければ彼れは終りまで啓發される時が無いであらう。(大正十四年二月)

## 歌 集 一 路

木下利玄氏のこの集の作を見て感ずることは、相當にやはらか味もあり、撓よなやかさもあると思はれる作者が、さう云ふ性を物の深さへ導き入れることをせず、浅いところで物の形似の奇變に囚はれたがるやうなところを見せてゐることである。「心の花」の人々に共通する缺點をこの作者も或程度迄具備してゐる。それは此の作者は、他の女性向きの人々と異つて、戀愛風の



あこがれ、やるせなさ、さう云ふ浮靡な作とは異つたところへ出てゐる、この作者のこゝろを置くところは、多く自然であり、子供であり、寺院といふやうなものであるので、さう云ふ點で、多くの鑑賞者の眼からは救はれるところを持つてゐる。しかし要するに一種の膚淺官能——俗情——である。

芭蕉が去來の「下臥につかみ分けばや糸さくら」を評して、穿鑿に過ぐると云ふ意味を述べたこと、また越人の「うらやまし思ひきる時猫の戀」を叱して俗人の本性を暴はしたとたしなめたことなどを思ひ合せらるる必要がある。この作者は俗人の情の趣くところを能く知つてゐる。一種の好奇。一種の見つけどころ。之れをやるに時好風の言語と一種の緩漫な調子とを以てしてゐるところ、どこ迄も流行しさうな姿態である。「日がな日ねもす」「おし黙り」「きらゝけきかもよ」「……殖林のみつしり立てりこの厚みはや」「……女の兒ばたと倒れそのまゝ泣くも」とどろとどろと廊下が鳴るも」「じりじり日照りに松蟬鳴けり」「空氣澱もりとんろりにほふ」と云ふ如き言葉が澤山に用ゐられてゐるのに、それを擔ふ主観はおそろしく餘裕がある。この餘裕のあるところが白秋君の奔騰と異り、竹柏園女性の耽醉と異つてゐるが、併しこの作者の鞭を

負はねばならないところは却つてこゝにあるのである。すなはち彼れの遊戯は痴人的で無く、可なり合理的である。感覺の出し入れが、手品師の如き平氣を以て扱はれてゐるところがある。近頃の白秋君がこゝを行かうとして、この作者よりも弛んだ手を見せてゐるのは、この作者の方がそこに本性があるからである。白秋君の嘗ての俗情には痴があつて救はれる。この作者のは術があつて鑿かしめる。術のあるところは赤彦君と共通する。たゞ赤彦君の術には覇氣の熱が伴ひ、この作者にはそれを缺く、畢竟するに彼れは自然的の材料の上に現代感覺の文化遊戯をしてゐるものではなからうか。(大正十四年二月)

## 月明りの歌

潮音の歌について他流の人たちは多くは分らないそうです。まさかこの人はと思ふ人が、見當ちがひな批評をして、雑誌などに出してゐるのを見ると、少々心細くなります。現にこのころも或る他門の人がたづねてきて私の正月號の



落葉して庭は冬木のこがらしの夜もすがらなる  
月明りかな

の歌を評するのをきいてみると、この五句の「月明りかな」としたのが分らないといふので  
す。どうすればよいかときくと、「音をとよもす」といふやうに、木枯へ集中して貫ひ度いとい  
ふのです。この批評でその概ねが分ります。三句の「こがらしの」で、もう音は餘情となつて  
ゐるのにそれをわざわざ音などをことはれば打ち壊しになつてしまふ、のみならず「月明りか  
な」としたので此の歌は魂を入れたのだと説いてやつても、どうしてもそれが分らないといふ  
のです。大體今の他流のやや高級とおぼしき人までか、その程度の頭であるやうに思はれるふ  
しがあります。(大正十四年二月)

### 感覺より觀念への道

葦原の濕けこき小屋に菅だゝみいやさや敷きて

吾がふたり寝し (神武天皇)

さねさし相模の小野に燃ゆる日の火中に立ちて

とひし君はも (橘姫)

近江のうみ瀬田の渡りにかづく鳥田上すぎて宇

治に捕へつ (武内宿禰)

道の後木幡をとめを神のごときこえしかどもあ

ひ枕まく (仁徳天皇)

山縣に蒔ける青菜も吉備人とともにし摘めば樂

しくもあるか (仁徳天皇)

感覺より觀念への道



これ等の歌は、すべて感覺に來る刺激を、その刺激のまゝの形に於て歌つてゐる。感覺を統一する觀念が無いではないが、——たとへば四の歌の圈點のところ、五の圈點のところなどに、微かではあるが感覺を帥ゐて、それ以上のものに趨かうとするところがあるのである——しかしそれは極めて漠然としたものである。感覺の背後にあつて、その感覺に或る意味の色合を付け、もしくはその感覺を他動的に支配して、こゝに一つのまとまつた意味の世界を構成しようとするところが無い。こゝに云ふ觀念とは、その作に表はれる作者の觀相の義である。感覺乃至知覺の表象を意味の方向に於て統一しようとする。その統一の形を云ふのである。

置目おまめもよ近江の置目あすよりは深山がくりて見

えずかもあらん (顯宗天皇)

妻を傷める歌一

山川に鴛二つゐてたぐひよくたぐへる妹を誰れ

か往いにけん (河原史滿)

おなじく二

もとごとくに花はさけども何とかも美しくし妹がまた咲き出來ぬ (同上)

今城いまきなる木叢こむらがうへに雲だにもしるくし立たば

何かなげかん (齊明天皇)

飛鳥川みなぎらひつゝゆく水のあひだもなくも

思ほゆるかも (同上)

前の一聯の作にくらべると、おなじく感覺に即いて歌つてゐるとは云ふものゝ、或る觀相が加はつて來てゐることが認められる。一の歌の「あすよりは……見えすかもあらん」といふところは、明日の寂寞を想ひやるので、こゝには、一步で無常の觀相に移る可能を見せてゐる。二の歌では、山川の鴛鴦むすぶの如く、あひ比たひうてゐた二人であるのに、その妹いもを誰れが往いなしためたといふので、もう全くの感覺に依據するだけの表現では無い。この表現にはもう可なりまで作者の意味の統一がはたらいてゐる。三の歌の「まだ咲き出來ぬ」四の歌の「なにかなげか



ん」五の歌の「あひだもなくも思ほゆるかも」など、すべて前同様の表現であつて、感覺から多少づゝ遊離してゆく觀念の跡をみとめることが出来る。

ものゝふの八十氏河の網代木にいさよふ浪のゆ  
くへしらずも (人麿)

久方の天ゆく月を網にさし吾が大君はきぬがさ  
にせり (人麿)

飛鳥川川淀さらす立つ霧のおもひすぐべき戀に  
あらなくに (赤人)

空見つ大和の國は神からし尊くあるらしこの舞  
見れば (元正天皇)

世のなかを何にたとへん朝びらき漕ぎ往にし船  
のあとなきごとし (沙彌滿誓)

こゝへ來れば、觀念はやゝ露はなものとつて、感覺以上のところへ出てゐる。一の歌では、「網代木にいさよふ浪」だけが感覺の部分であつて、その他は、意味の部分になる。この意味は、作者の觀相から出て來たもので、こゝには生滅流轉の觀念が覗いてゐる。これを前々項にあげた神武天皇などの一聯に比すると、その序法からしてすでに、觀念的の詠嘆であることに氣づくであらう。二の歌は觀相の内容を異にしてゐるが、大君の威嚴を、月の光耀に於て觀じたので、之れはまた大君を月の觀念のなかに取り入れたと云つてよい。「きぬがさにせり」と、疑ふところ無く決定したところに、此の作者の意志が動いて、一首を緊切のひゞきにしてゐるのである。こゝにこの作の詩としての感動の漲りを感じるのであるが、それはこの詩が感覺的であるためでは無い、信する力が作者の生命を搖蕩うごかしてゐるのである。「野の一花の美しさは、ソロモンの榮えをも凌げり」といふは一つの觀念の叙述である。これとても信する力を以て道破すれば立派な詩となるのである。「吾が大君は天上の月の輝きを衣笠にしてゐる」といふも實にあることでは無く虚體のことである。虚體のことといへども、信する力(誠)か加はれば詩となる。感覺的の素材が詩であり得ないことは、觀念の意味が詩であり得ないと同様で



ある。それは感覺も觀念も内外の相違であるだけで、すべて主觀（客觀となり得ざる能動の主觀）に對しては客位に置かるるものだからである。詩の純否は一にかゝつて能動の主觀のはたらきにある。萬葉集の感情は發生期的であつて、まだ内觀の微妙に入つてはゐないが、之れとともに遲疑するところなく感覺を肯定するところがある。この肯定はすなはち信する力である。萬葉集の特色はこゝにある。

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜のながき思ひ

はわれぞまされる（忠房）

待つ人にあらぬものから初雁のけさ鳴くこゑの

めづらしきかな（元方）

こりすまにまたも無き名の立ちぬべし人にくか

らぬ世にしすまへば（讀人不知）

世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人

もこひしかりけり（貫之）

大空はこひしき人の形見かはもの思ふごとに眺

めらるらん（人眞）

奈良朝に活動した人たちの子孫は、平安朝になつては、おほく堂上の靜閑に處し得る人となつた。さうして學藝と宗教の教養を経て、その感覺は思想を生産し、その思想は人の心の經緯をたどり、更に進んで時の無常と、人の命の不可思議を思惟するに至つた。本居翁のいふところの「物の哀れ」はかゝる思惟のうへに來た觀念世界の風光の名である。その根本は儒教と就中佛教のたまものであるが、しかし儒佛二教の思惟が人を作つたといふよりも、人の心の成長は、自然に之れ等の教化の深みへ入り込むやうになつたと見る方が至當であらう。平安朝の文藝はかう云ふ人々の上に作られたものであることを思ふと、古今集の觀念と、源氏物語の思惟とが偶然で無いことを知るであらう。彼れ等の心は人の内面の微細に分け入つた、分け入れば分け入るに従つて、心相の交渉の込み入つてゐることに驚かすにゐられなかつた。そこに内觀人の落ちゆく遲疑と停廻とがあつた。彼れ等の眼は明るい朗らかさに別れて深い色に變つて行



つた。さうして一面に心のつゝまじさを知り、一面にわが心の不可思議を思ふに至つた。平安朝人は、奈良朝人の如く、端的に感情を肯定するやうな速決の簡單さに居られなくなつたのである。

それは教養あるものが、事理の辨別の幾微に面して、或る種の怖れを感じる如き心理である。それはまた露骨よりは暗示を、直截よりは隱約を尊しとする心理とも云へる。こゝに平安朝和歌の長所と缺點とがあらはれて来る。「きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひはわれぞまされる。」この柔かみと撓り、さうしてその陰鬱さは、さういふ心理から出て来る。「世の中は斯くこそありけれ吹く風の目に見ぬ人もこひしかりけり。」このほのかさと無形を追ふ心、さうして一面に附隨する悠遠的なところも同じくその心理の表はれである。「大空は戀しき人の形見かは」とはまことにこの時代の人にふさはしい詠嘆である。こゝには奈良朝の悲嘆（感覺的）がしづかに瀰漫して、平安朝的の靜寂（觀念的）に成長しつゝある跡を見ることが出来る。この靜寂の内容となるものが「物の哀れ」である。それ故に「物の哀れ」は生な憂苦では

ない。個としての身と、個としての物から遊離して、しかもあらゆる物に應ずる普遍の物悲しさである。之れを予は觀念界の風光と名づける。古今と源氏とを見るものは、まづこの事を心に置かなければならぬ。（大正十四年六月）



## 源俊頼の位置

庭の花もとの梢に吹きかへせ散らすのみやはこ  
ころなるべき (女房安藝)

雪の色をうばひて咲ける卯の花に小野の里人冬  
ごもりすな (公實)

柞つぎちる岩間をくゞる鴨鳥はおのが青羽ももみぢ  
しにけり (伊家)

たなばたの苔の衣をいとはすば人なみなみに貸  
しもしてまし (能因)

玉づさをかけて來つれどかりがねのうはの空に  
もきこゆなるかな (謠人不知)

これは平安朝の末期に属する金葉集の歌である。こゝには古今集の型をを破らうとする心の飛躍があるこの飛躍はまた古今集の内観的傾向——觀念——に對する反動の飛躍とも云ふべきものである。古今集の作つた觀念の型は、後撰、拾遺、後拾遺を経て、いよいよ内向すべき運命に置かれながら、その生活の安泰は人々の意志の衝迫を弱からしめ、ために内面を無底限に押し切つてすゝむことが出來ず、却つて古今集に萌芽した「物の哀れ」の風光を汚損するものとしてしまつた。この情勢は後拾遺に至つてその極點に達する。こゝにはたゞ七情域内の心理に巧智の斡旋を施すやうな内容があつた。またそこには、技巧上の功利主義にはづかな満足を購ふやうな形があつた。金葉集の出現はこゝに於てわづかにその反動の意義をたち得るのであるが、しかしその反動といふものもまだ充分必然的の自然に於て生み出されなかつた。

金葉集の歌を見ると、先づ何等か人の眼を驚かしてやらうといふ好奇の手づまが目につく。その動機が意識的であるところに依然として平安朝的の停廻的餘裕がある。この餘裕のゆゑに平安朝の歌はおほむね技術化されて解せられるところがあるが、金葉集はこの技術を思ひきつて大袈裟に見せたので、詮じつめれば三代集への反動では無くむしろその擴大といふのが



至當である。「庭の花もとの梢に吹吹きかへせ」とは人爲の跳梁もこゝに至つて極まれり、こゝにはたゞ自然を支配するわが儘の好奇があるのみである。「散らすのみやはこゝろなるべき」浅い理づめである。「雪の色をうばひて咲ける……」は唐詩などの影響をうけた言葉で決して悪いものではない。斯ういふところは金葉集の撰者俊頼風の好みである。之れが後の俊成に成長し、さらに新古今に發達し、さらに遠く芭蕉にも影響したところであるが、これを受けて「小野の里人冬ごもりすな」とは全く貞徳流の駄洒落である。後の貞徳の俳諧と金葉集との間には一脈相通するところのものゝあることは免れない、果して後の俳諧人は金葉集を何かといへばその枕詞まくらごころに引いてゐるのを見る。

第三の「柞ちる岩間をくゞる鴨鳥はおのが青羽ももみぢしにけり」など殆んど貞徳門の附合を見るやうである。上句を前句とすれば、付け手は「おのが青羽ももみぢしにけり」と、前句の引つ懸けて來た手づまを見事に翻ひもといて見せて、そこに一つの快感をおのれ自身に買はうとする。この快感の内容は全く巧智的の功利主義であつて、何等高級の詩情をもたらしものではないのである。貞門の俳諧はこの功利主義をすつと下情に接近させて、一層きはどいところに

於てこの快感を貪らうとしたのである。第四は能因らしい滑稽の洒落である。この法師などもあらゆる山川を遊涉しながら、山川の氣を身にしめてはゐない。第五の歌に至つてはもう全くの頓智である。斯うして金葉集は俊頼好みの大袈裟と機智と頓才とに落ちて、三代集以後の情容を引き直さうとした動機は、あべこべにその情容を擴大して見せる結果となつてしまつた。

しかし金葉集にも歴史過程上の功は無いてもなかつた。その思ひきつた大袈裟と機智とは、從來とかくねばり勝ちの——情味澤山——芭蕉のいはゆるねちみやくの歌を、ある程度まで洗ひ酒いだものにしてくれたのである。萬葉集では或るものは切きつ尖さきが鋭すぎて、青く光り、或るものは、たゞ熱し過ぎて赤く焼けたやうなものであつたのが、古今集へ來ると、靜かにおんもりと落ち着いたものになつたがいかにも取りすましたところがある。それが金葉集へ來ると、さらりとくだけたものになつて、その體容のこなしが非常にらくになつて來てゐる。堂上風の衣冠束帯きんぐんを脱ぎ棄て、ともすれば下くだ腐の心意氣で行かうとするところがある。こゝに平安末期の政治組織——ことに權力の下向的推移を瞥見しうるのである。その意味に於ての平民的推移を、微かながら金葉集のうへに見ることが出来る。



この里も夕立しけり浅芽生に露のすがらぬ草の  
葉もなし (俊頼)

風ふけば蓮のうき葉に玉こえて涼しくなりぬ日  
ぐらしの聲 (俊頼)

風ふけば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の  
月を見るかな (忠隆)

夏山の青葉まじりの遅さくら初花よりもめづら  
しきかな (盛房)

朝戸明けて春のこすゑの雪見れば初花ともやい  
ふべかるらん (公實)

夕されば門田の稻葉おとづれてあしのまるやに  
秋風ぞふく (隆信)

天の川かへさの船に波かけよ乗り煩はゞ程も經ふ

ばかり (女房越後)

斯う云ふ酒脱な味は古今集には無いやうに思はれる。古今集では今すこし景情をむくやかな  
心に於て味はうとする。それは主として古今集作者の心のたしなみから出てゐるが、金集集に  
なると、そのたしなみを破つて、その場その時の心意氣を見せようとする。萬葉では強さも脆さ  
も生地まぢのまゝで行かうとしてゐるが、古今集ではもうそれでは満足出来ない容體かたけはひが重おもり  
かになつて、そこに心の粧まひをつくらうとしてゐる。「久方の光のどけき春の日にしづこゝろな  
く花のちるらん」(業平)といふのは心の粧まひである。その心の粧まひをさくらの花の散る姿に移  
し入れて、さくらの姿のうへに、あらためてわれ自身の粧まひを味はうとするのである。物の姿  
が直ちにわれ自身の心の趣(風情)となり、われ自身の心の風情が直ちに物の姿となるやうに  
観ずるといふほどの——いはゆる芭蕉の象徴の域に入るほどの——物を古今集は見せてゐない  
が、その姿情相即のきざしの芽はやくすでに古今集に見えてゐるのである。萬葉はその姿情  
相即を小兒の無心さに於て行ひ、古今集はこれを理智の目ざめに於て行はうとする。古今集は  
その理智の小故にかゝづらはつてその相即の一致はおほく目的に反したものとなつてしまつた



のは遺憾であるが、これを靜かに精進の三昧に押しすすめて、古今集の目途を可なりまで成就せしめたのが俊成卿である。金葉集の位置はあだかも俊成の仕事の露ばらひの趣きがある。俊成の師基俊は金葉集では非常な虐待をうけてゐるのであるが、それは此の集の撰者が俊頼であり、俊頼の藝敵が藤原基俊であることを想像すれば肯かれることである。俊頼基俊と一口に匹敵するものゝ如く云ふが、歌に於ては到底俊頼の脚下にも及ばないと思はれるのが基俊である。俊成は基俊を師としながら、歌は全くその藝敵であるところの俊頼を學び、その弊をしりぞけて見事に長所のみを奪つたおもむきがある。この點に於て俊頼の散木弃歌集と俊成の長秋詠藻との間には強い感合があると見るのである。

しら河の花のこずゑを見わたせば松こそ花のた  
えまなりけれ

跡たえてけはしき谷の岩のうへに花こきおろす

## 春の山風

身にかへて惜しむにとまる花ならばけふやわが

世は限りならまし

吹く風に藤江の浦を見わたせば浪はこずゑのも  
のにぞありける

み園生に麥の秋風そよめきて山ほとゝぎす忍び  
なくなり

明けば先づ散らさで折らんほとゝぎす花たちば  
なの枝になくなり

夕されば萩をみなへし靡かしてやさしの野邊の  
風のけしきや

夕されば野べもや物をおもふらん松蟲鳴きて露  
じめりけり

秋くればしめぢが原に咲きそむる萩の葉冷えに  
すがる鳴くなり

源俊頼の位置



あすも來ん野ぢの玉川萩こえて色なる波に月や  
どりけり

隈もなき月の光りにはかられて大鴉鳥オオカラスも晝と鳴  
くなり

木枯の雪ふきはらふ高嶺より冴えても月のすみ  
のぼるかな

日暮るれば逢ふ人もなしまさきちる峯のあらし  
の音ばかりして

さまざまにこゝろぞとまる宮城野の花のいろい  
ろ蟲のいろいろ

これ等は俊頼集中のものである。この邊にすでに新古今調の風韻が匂つてゐるのを見る。これ等はいふまでも無く古今集の道の自然に開展された形であるが、古今集のつゝましさにはこの主觀の優勢な伸暢が無い。言葉を變へて云へば、之れほど迄に物の急所に突つ込んで行く心

の峻しさが無い。古へから一代の歌仙ともいはれる程のものは、大方この心の峻しさを持つてゐた。自然の秘腑（この言葉は少しく奇であるが）にぐいと一針を入れるやうなところがある。人麿がそれである。西行がそれである。俊成定家もそれである。芭蕉はもちろんそれであつた。たゞ俊成と芭蕉はその突つ込む急所を知つてゐながら、そこ迄露つゆはに切り込まずに五六分のところで、とめることを知つてゐたのである。こゝに定家の及ばぬ俊成があり、西行の及ばぬ芭蕉があつたとおもはれる。俊頼と定家とはそこをやりすぎた爲めにやゝ品位を下し、歌を大袈裟なものに見せてしまつた。（大正十四年七月）



## 姿と情

しぐるゝや田のあら株の黒むほど

と云へば、この景のあらはしてゐる姿が人の心に感合して、或る風情をさそひ出して来る。蕉門でいふところの姿情相即の形が爰にある。ずつしりと時雨が降りこんでこの頃刈つたばかりの稻株を濡らしてゐるのである。新しいものが古びをもつて来る、生長したものが熟しつゝ、ひねてゆく、さうして、世の侘びや寂しさに染まつて、最後のからびにまで行く。この句には何か世の抵抗しがたい力の流轉といふやうなものを感ぜしめられる。さういふものを芭蕉は稻株のうへに見たのである。象徴とは風情（心のおもむき）を物の姿のうへに観ることであるが、蕉門では、それを心の姿と言つてゐた。心の姿といへば、この言葉はもう姿情相即の義に於て語られてゐるのである。

かくれけり師走の海のかいつぶり

「かくれけり」で、かいつぶりの動作は人のものになつてゐる。人の風情の中の姿になつてゐる。これを「もぐりけり」といふと、その飽和が解けて彼我の對立になつてしまふ。この場合「もぐりけり」の方が生々しい力がこもつてゐてよい、「ますらをぶり」でよいといふならば、そこはもう智と蒙との境ひであつて、全く言語道斷といふより外ない。

うごく竹の葉

なびく竹の葉

そよぐ竹の葉

そよめく竹の葉

そよめく竹の葉

一葉の竹の動きにもこれほどの姿がある。その場合の作者の胸中の風情はどの姿かに感合するのである。感合してたとへばそのうちの「そよめく竹の葉」を採つたとする。胸中の風情が形を取つてあらはれたのである。そよめく竹の葉はもう物の姿では無い。心の姿である。姿情

姿と情



相即の境に入つたのである。芭蕉の句を味ふものが此の一點を見のがしては大變なことになる。

一つ家に遊女も寝たり萩と月

ひよろひよるとなほ露けしや女郎花

秋の夜をうちくづしたる嘶かな

まづたのむ椎の木もあり夏木立

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗

心の姿のある句である。かういふ芭蕉になる過程として、たとへば初期の作

萩の聲こや秋風の口うつし

といふやうなのを見てくる。萩の風を心の姿のなかのものとしようと苦心した跡がほとんど血痕斑々として見えてゐるやうに思ふ。(大正十四年七月)

## 潮音の準備時代

潮音十週年紀念會を機會に、私が辿つて参りました潮音以前の約二十年間の歌に就てお話し  
て見ようと思ひます。之れは潮音の歌風が生れるに就て多少の關係がある事と思ふからであり  
ます。潮音が現在の歌壇の中にどういふ位置を占めてゐるかといふことはこゝに申す迄もあり  
ません。この歌風は潮音獨特のものでありまして、明治以後では何人からもその影響を受けて  
居らない。もちろん古人の傳統をさぐりますれば、先蹤と申すものが無いではありませんが、  
之れはもとよりさうあるべきが本當であります。ただ併し古人の道の摸倣であつてはならな  
い。古人の道の體得でなければならぬ。體得の域まで参りますれば、古人の道はその體得者  
を鼓舞して、自由の道を取らせませす。この自由を通達といひます。すなはち眞理の自由に出た  
ので、これを芭蕉は「格を出づる」といふ言葉で説いてゐます。古人の道——眞理——が、初  
めて人に臨む状態は、過酷といふほどに峻嚴であります。多くの人はこの峻嚴に耐へられない



で、この道から逸れる。さうして得手勝手な自由をかゝげて、眞理らしく振舞ふのであります。しかしそれは眞理でも何でも無い。いはゞ啓蒙期の自由でありまして、現代の新人などと云ふのは大概この類のものが多いのであります。さうして古人を偶像などと云つて痛快がつてゐます。

潮音以前の私の歌にはまだ古人の道が臨んで居りません。たゞその時の好みに従つて古人の歌を愛したといふに過ぎないのであります。古人が厳しく私等に臨んでまゐりましたのは「潮音」の時期からであります。潮音は古人の道に緊しめを受けながらその格に入るのに十年の刻苦を要しました。潮音の大正十三年十四年はこの格の成り立つたところでありまするがゆゑに、非常に道程上重要な時期であります。今後の十年は潮音としましては、自由の道を取るべき時になつて居ります。この自由は最早や得手勝手の啓蒙的自由ではありません。古人の道に光被された自由であります。斯かる自由の義に於て、各の個性を開展するのが、東洋古哲のいはゆる性に率ふといふことであります。芭蕉の格に入るといふのは、修道門です、それ故に束縛であります。格を出るといふのは行道門です。こゝにはじめて自性の發揮があります。今の

世の多くの人は道を修むることをせずして、たゞちに自性を發揮しようとするのであるから、殆ふくしてその道は行ふべからざるものになるのであります。潮音の或る者はすでに格を出て居ります。また或る者は出ようとするところに居ります。斯うして六百人餘りの社友はその修行の深淺を順序に次第して、初歩の者にまで及ぶのであります。初歩のものは、潮音の道を信する日が浅いので、まだ道の峻厳を知ることが少いかも知れませぬ。さうしてともすれば外道に逸し、得手勝手の自由を唱へて、いはゆる新人にならうとなさる方もままあるやうであります。それは亡びに入るより外ないのであります。次ぎに主題に入ります。潮音以前の私の作歌の経路を分つて大體二期といたします。

## つゆ草時代

これは明治三十年から初まつて、おなじく三十四年の終りまで、凡そ五ヶ年に亘る期間であります。年齢で申しますれば私の二十二歳から二十六歳までであります。その當時私の耽讀した書物は古今集、桂園一枝それに源氏物語などであります。三十三年から萬葉集を讀むやうに



なつて、その影響を受けた作が見えるやうになりました。この時期が三年ばかり続いたやうに思ひます。假につゆ草時代を前半と後半に分けます。前半のものは、大體古今集風であるが、桂園一枝の清新なところに感じてゐたらしいので、想意がやゝ新味を帯びてゐるやうに思ひます。即ち古今風ではあるが、舊派歌人のやうな典型に囚はれてゐない、當時のいはゆる新派の歌であつたやうに思ひます。

ゆく雲を見おくるなべにその雲のゆくへも分か

ず日も暮れにけり(明治三十年)

けふばかり時雨なふりそ思ふ子の初山越のわび

しとおもふに(同)

うたゝねの夢にも見つる今宵だに來まさぬ君を

いつとか待たん(同)

これ等には幾分古今風のおんもりとしたむくやかさが來てゐるやうに思ふ。桂園の張りどやえはなかなかまだ學ぶことが出來なかつたものらしい。最初の作のなべにといふ言葉は、古今集

の「日ぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」を取つたので、非常に得意であつたのであります。その翌年になりますと歌體は大體同じてありますが、感情がやゝ昂<sup>たか</sup>まつて來てゐます。それには理由があります。

ちまた路の柳ふきとく春風にをとめが髪も伸び

やまさらん(明治三十一年)

おきて來し長野のをとめ春風に思ひうらぶれて

われを待つらん(同)

谷の巢をいまだ立ちえぬうぐひすの雛のごとき

君をいかにせん(同)

この三十一年に地方の師範學校を卒業しましたが、その時教へてゐた附屬小學の生徒に別れたので、それを感情の中に置いて作つたのであります。此のころは源氏を讀んで、紫の上のあどけ無いのに思ひを牽かれてゐたのであります。明治三十三年に私たち歌の新調を追ふものゝ結社ともいふべき「この花會」が出來ました。



つゆ草時代の後半を明治三十三年とします。私の和田村時代であります。

世をさけて里にこもれば大根引おかしき唄も耳なれにけり

猿引きて旅に迷へる藝人のたもとに寒きこがらしの風

病みてぬる病の窓に吹きおちぬ外山の荻に秋つぐる風

この邊にいくらか景樹風なところが来て居るやうに思ひます。大根引は景樹の平明體です「袂にさむき」「吹きおちぬ」などは景樹の緊張體であるやうに思ひます。この年の秋ごろから萬葉を耽讀しました。若年のことであるから直ぐにその影響が現はれてゐます。

口あきてうたひて居れば思ひなき子等にも似たりますらをわれは(三十三年)

秀つ峯を西に見さけてみすゞ刈る信濃のみちに

われひとり立つ(同)

ふる寺の庫裡にすくみて教へ子を教へてあれば年はくれたり(同)

天なるや神のみ園を追はれこしアダムの如き君にやはあらぬ(同)

はろばろに家さかりきて秋づくや田居の伏屋に鳴きてかあるらん(同)

明治三十四年は萬葉心酔の時代といふべきもので、私たちのこの花會はこぞつてその風體を追うてゐた。矢野奇偶といふ友人、興曾井千尋といふ友などはことにその信者であつた。窪田通治君はこの前年「明星」が出たので、その方へ歌を出すやうになつて、この花會の方はたゞ員に備はるのみであつたのであります。

大君をあやにかしこみ天地の年のはじめにこと

ほぎまつる(三十四年)

潮音の準備時代



谷ぐくのさ渡るきはみ大君のしらすさかひに年  
はきにけり(同)

鐘寒きみ寺の庭の朝霜に白玉椿こぼれてありけ  
り(同)

妻ごめに家みつくとさゝがにのみだれ榛原春  
の草伐る(同)

平の宮うつらしますといでていにし御幸の伴の  
かへる時なく(同)

敷きませしこちごちの宮野となりて蜘蛛こゝろ  
なし春の風ふく(同)

之等は多くこの花會の題詠であります。萬葉の剛強といふよりも寧ろ素直な方を多分に受けたやうに思ひます。これは萬葉を讀んでゐる間に、加茂眞淵の作に注意が向けられたのもその一因であります。加茂眞淵のやや新古今風を加味したやうな作は、ひどく私の氣に入つたのであ

ります。續いて縣門の字萬伎、魚彦、枝直、よの子、倭文子等の作にも注意が向いてまゐりました。

とりよろふ筑波の山の女男山のなぐはし山やま  
づ霞むらん(三十四年)

大汐はゆたにさしきて芝濱や渚の杭の波にかく  
る(三十三年)

之れは全く眞淵調であります。

まさやかに晴れたる海のをち方ゆもろこし船の  
旗の見えくる

足弱の王子の蛭子を沖へやると海びの水門みとに小  
舟据ゑたり

之れは宇萬伎、魚彦あたりの風體であります。

ふけゆけば大殿油おともまたゝきて廣間の床の花も



ほろほろ(三十四年)

染めぬける君が浴衣ゆたの菖蒲草あやめいささめやすきいろの  
戀はわがせじ(三十三年)

鉢にうゑて見つゝしをれば肝向ふ心ぞ清き蘭の  
しだり葉(三十三年)

とひ來れば松のつゆふり松葉ふり涙ぞ落つるお  
くつきどころ(同)

藤浪のかけさす瀬戸の河水によどめる春も暮れ  
てこそゆけ(三十四年)

青柳のかけふむ駒のいなゝきに有明月夜しらみ  
そめたる(同)

有明の月はかくれて卯の花のほのめくかげに鳴  
くほとゝぎす(三十四年)

之等は萬葉風から離れようとする——私としては、新味を出さうとしたものであります。この邊から、そろそろ新古今の歌風が私の愛惜の中のものとなつて來つゝあるやうに思ひます。「山上篇」の諸作はここに必然の勢ひをもつて生まれて來なければならぬやうに思はれます。

山上篇時代

山上篇は明治三十五年から、同じく三十七年へかけての作を集めたものであります。「つゆ草」にたゞちに接續するものであります。此の時分心が若く、ともすれば感傷に陥らうとした私は、不思議にその危険期を抑へ畢ほすことが出來て、もつぱら靜かな心持を愛するやうになりました。一つは讀書から與へられたものと思ふが、また一つはその住居が非常に閑適であつたことも影響してゐると思ひます。家は窪田通治君の令兄のお宅の離れ間で、そこには横の大木に風の濃い若芽などが、池をめぐつて茂つてゐたことを思ひます。主人の長男の窪田東臯、それに矢ヶ崎賢治、川崎杜外、小松靜雨、堤茂雄など、この花會の若手が折々たづねて來て、晝夜を徹して歌作にふけた時であります。



さびしさに背戸のゆふべを出でて見つ河楊しろ

き秋風の村(三十五年)

星しろく夜はさながらに明けにけり菊を流るゝ

秋河の村(同)

水に沈む秋ひとひらの黄いろぐも音なき寺の庭

の眞晝日(同)

向つをに夕日かぎろひ眼もはるの河原もよぎに

秋風なびく(同)

もろこしの廣葉がうれをなびかして今宵ぞ吹け

る初秋の風(同)

之れ等はその閑適の寂しさから出たものであります。私はひとりその離れの部屋に秋の日の光りが庭の青苔に映つてゐる景を眺めて歌を思ふやうな日がつゞきました。三十六年にはこの閑適な村の生活をすてて松本の女學校へ轉任するやうになつたのであるが、之れは私の歌生涯に

取つて必らずしも幸福では無かつたやうに思ひます。女學校の生活は絶えず私に或る克己をうながしました。また同僚との關係も村の時代とは丸で變つたやうな形式的の應接に煩はされるやうなものになつて、私は二重の心理に窮屈を感じなければならぬやうになつたのであります。此の落着のない動搖の心を抱いて、その年の暑中休暇が来るが早いか、たゞ一人安房北條の海岸に遊びに行きました。懷には菊版二冊にまとめられた「即興詩人」二冊を携へたのみであります——即興詩人は「めざまし草」といふ鷗外の雑誌できれぎれに讀んでゐたのでありますが、この機會に首尾を通して見ようと思つたのであります——此の書を読む外は、ことごとく歌を作らうとの覺悟であつたのであります。即興詩人の二三章を讀んでは海邊へ出かける。それが非常に楽しみで心がだんだんに潤つて行つたことを覚えてゐます。即興詩人は下巻に入つて私の心を全く囚へてしまひました。アントニオと呼びかけるフランチェスカ夫人の聲に、私はいくたび、私自身の燥狂を省みたことでせう。「噴火山」「天火人火」もゆるる河「苦言」「古祠」。「瞽女」の章などを辿る心持は今あさやかに胸に呼びかへされます。讀み入つて前後も知らぬやうになつてしまふ、我れ自身にかへつて氣がつくと兩眼は涙で一ぱいになつてゐるといふ風で



あつたのであります。「海邊の朝」と題するその時の詩が山上篇に載つて居ります。

さやかなる波の音に

さめいでよ眠げの小貝

明け方の日の光りは

大海にあふれてみちぬ

絶えず來ては磯の干瀉に

小さな砂とたはむれ

あふれてはまた落ちかへる

しのゝめの波のきよけさ

見よ朝は磯の眞砂を

やゝやゝに西に歩みて

波ちかきあらゝ小松に

うす藍のいろとあらはれ

ほの暗き沖に出でては

白き藻の花とさきつゝ

離れ洲の葦のこちごち

このねぬる風とそよぎぬ

さめよさめよ眠げの小貝

朝は野に海にあふれぬ

さやかなる汐とうかびて

見よ走る光りのかげを

潮音の準備時代



夢ごもる底の小貝もさめいでてこのゆたかなる  
日にむかふらん

安房の短歌は「海苞一」、「海苞二」、「海の秋」と題して山上篇に載せてあるものですが、これは腹一ぱいに心の鬱屈を伸べたやうなところがあります。しみじみと海邊の風物に思ひを寄せてゐるうちに、心がいつ知らず舒暢されて行つたといふやうなものでありませう。

おごそかなる物とたゞ見る夕暮の大わだつみを

流るゝ日のかげ

寄せかへりかつくづれゆく磯鼻の浪にや肖へん

おのが思ひは

さらばひて海に網ひくあさましの海人がおんな姫に似  
ても立つ松

雲は西に流れて汐はかへりけり人は渚の草にい  
こへる

安房の海や渚の荻に吹きそめて秋づく風に荒る  
る海づら

うち群れて網ひく浦のあまをとめ伊豆男いづのこひ  
に鳴く夜もあらん

大海に波けあふれてかへるなり人の思ひもせき  
あへぬ宵

暮れはてゝ海や空なるをち方の波間にほひて照  
れる夕づつ

日は入りてみ空の雲のくれなるに匂ふしばしを  
わが世といはん

海ちかき岡べの合歡木はけしきやししぶきの風



にこずゑうちふる  
わが胸のたぎつおもひをさながらに寄せてはか  
へす沖の大波

即興詩人から暗示をうけた作もこの海苞のなかにあります。

ひるがへる風に木の葉のこゝちして命の船のた  
だよふ姿

岩は皆ふきさらされて死の影をとむらふ墓の白  
きに似たり

くれなるの火を噴く山におのゝきし詩のうた人  
の情知る旅

ひとり身の旅におぼゆる憂きおもひ干潟に鳥よ  
おちかへり鳴け

當時は、與謝野氏の「明星」ぶりの歌が盛んに世に行はれてゐる時であつたので、私の歌もそ

の影響を多少は蒙つたのでありますが、しかし決して独自の立場を失つてはゐなかつたのであ  
ります。三十七年には佐久の高原から、蓼科山をこえて、諏訪の山浦を遊涉しました。

町をいで、秋草なびく廣野原一筋道を碓氷にこ  
ゆる

上つ毛の岩山いぶく天つ風にくづれて北に飛ぶ  
炎かな(淺間山)

水は藍に花みな白き千曲川柳にひくき秋の山見  
る

山上篇には三十七年までの作が載つてゐて、その後の作はまだ集になつてはゐない。集にす  
るほどの数も無く、また佳い作も無かつたのであります。ただ三十九年の夏は略ぼ一ヶ月を費  
やして満鮮の旅行をして居ります。この間に二百首ほどの作がありますが、こゝにも秀ぐれた  
ものを遺してゐません。これは三十七年ごろから私に來た讀書の傾向が一變したことの影響も  
あらうかと思ひます。この頃から私はもつぱら哲學の書物ばかり讀んでゐたのであります。ソ



クラテス、プラトリー、スピノザ、カントといふやうな名前は人麿、貫之、俊成、定家、實朝などよりも威厳ある壓力を以て私に臨むやうになつてゐたのであります。この状態は三十八年から四十二年まで五年の間に亘つて持續されました。四十一年四月東京へ出て来て評論風のものを書いたのもこの思惟的形勢の一つの表はれであつたと思ひます。四十三年に東京に於て「同人」といふ短歌の雑誌を出して四號で廢刊し、大正二年若山牧水君と第二期の「創作」を復活して翌三年十一月に休刊して居ります。此の時私の年齢はもう三十九歳になつて居ります。「潮音」を創めたのはその翌年あだかも私の四十歳の時であります。「つゆ草」、「山上篇」、「同人」、「創作」等その各に傾けた心勞は、今に於て見るとすべて「潮音」の準備時代になつてゐたやうに思はれます。大正四年はこの意味に於て、私に重大な一區劃を作つてゐるやうに思ひます。(大正十四年八月)

## 芭蕉翁句評一軸

此俳本は吾祖不玉叟の卷にして、はせを翁の評せるものなり。過ぎし頃回録の災侍りて、家本うせけるを、二木何がしのひめ置きしを乞侍りてうつしぬ。吾方技の道ならねども、かゝる志のたへなるを都の空に残しけむも風雅の美談ならめと、筆をとり侍るのみ。

延享四卯年葉月

樂水軒書

○ 潜淵庵不玉

坊主子や天窓うたるゝ初電

近年の作、心情専に用る故句躰重々し。

左候へば愚句躰多くは景氣斗を用候。これ

らも愚意相應に□感美候。

犬守り居る木の葉散なり

芭蕉翁句評一軸

三六三



犬守る言葉小坊主のさはり急になり候、  
唯木の葉散と斗うちなぐり有べきにや。

箕を作る庵は月のさし入て

寄所感心。一句躰疎ならず。風景俳意尤に候。

藁の丸太のさび鮎の串

よろし。

博勞の泊定めぬ秋の風

句躰幽玄俳意奇妙に覺候。

柿の羽織の暮の稻妻

祭文の拍子にかゝる蟲の聲

拍子にかゝるとむしの聲にとりたる所聊  
いやしきにや。

瓦落ちたる淺茅生の中

奇意の風景大感不斜候。

本丸のから松ひとり縁にて

本丸となくて瓦あしらひたき歟。

富士は世界の雪の大將

富士は軒端に續けて、道灌勇士の好る事  
にや。然る時は大將の字感。

幽なる筋より戀の登り初

心はかよひ候て哀に侍れども、句面いさ  
よかとり寄うときにや

小町が像のをがまるゝ哉

珍重々々。

縁とりに雀の遊ぶ朝日影

船のむしやくゝ水の水上

芭蕉翁句評一軸



三越路や乙の寺の花さかり

乙寺は御教へにまかせ貴境下向節、予も立寄拜み候。

牢人の子が膳すゆる春

唯事の一體新。此一味珍重。

夕月の朧の眉のうつくしく

小柴垣より鏡とき呼ぶ

うつり所よく侍る。

古井に咲きかゝりたる桐の花

感心

脚絆もとらで拜む灌佛

俳諧上達、此句にてあらはれ候。尙御工

夫、老後の御菜、尤に候。

懐の餅をおとしてころ／＼と

酒通る間は一座皺面

若武者の障子を蹴込月の影

泣く泣く露にぬるゝ御輿

隠逸に水無瀬の菊の花咲て

一句あさからず、餘情かぎりなしとやいはむ。

登り初たる山本の雲

夕は秋と何おもひけむとや。三句のうつり、うるさき歎。

折々は三社を捻り馬薬煉

一體むつかしきにや。

そら聾のつくり氣違

芭蕉翁句評一軸



和歌俳諧の諸問題

左も有るべき事にや。

世の中は師走の末の物おもひ

あしらひ、くるしからず。

喰うてありく女房の扶持

大感新意狂意□

ナウ道邊の名はことごとくし茶屋立て

一句幽玄

履をうづむる御廟淋敷

とりのきやう神妙

肩衣に雨とはなしに降りかゝり

一句奇特

鯪は雲井に金の鯪

よろし

黒坊が帆繩をたぐる花の春

おなじ

音はいろくの島の鶯

一卷熟覽感吟不斜候。近年武府之風雅分分散々。適々邪路の輩も相見え候處、微軀方寸相傳へて、邊國鄙のかたはらより、かゝる風雅を見せしめ侍る、誠に殊勝の事に候。予曾以點削斷筆といへども、遠國の志といひ、先年行脚の情難忘によりて聊評詞脇書加のみ也。

元祿六年中

芭蕉庵桃青

(完來編「あきの夜」)

芭蕉翁句評一軸



## 芭蕉翁句評一軸より

箕をつくる庵は月のさし入りて藁の丸太のさび

鮎の串

こゝには木の皮をもつて箕を作つてゐる老人の家が浮んで来る。その小さい庵に今宵の月がさし込んでゐる。そとはやゝ寒い冷氣に、あすの朝は霜でも来るといふほどの冴えた景色であるが、この老人の手許は、ともし火も暗く、家の中が何となくもの佗しい。見ると頭の上の梁から藁束が下つてゐてそれに鮎の串がさしてある。この鮎はついこのごろ秋に這入つてから、漁つた鮎の焼串である。——箕をつくる家といふのであるから、ことに藁束に鮎の焼串がさしてあるといふのであるから、この家の境涯が分かる。この家は山近いところであり、瀬を爲して走る河もあるところであらう。漁のかたはらに箕をつくる渡世でもあらうか、この詩境のもたらす味はきはめて複雑であり、かたがた約ましく佗びたくらしの趣きも見える。材料をいき

なり投げ出すやうな詠み方であるが、その材料の統一に、この作者の心の味ひが搾り出される。かういふ歌は二十一代集を通じて皆無であり、徳川時代の歌人にも見ることは出来無い。和歌史上の歌は一絃琴か單音唱歌の感じである。これになると感じの世界はがらりと異つて来る。「月のさし入りて」のやゝ鋭い語勢「藁の丸太」とぐつと放膽に突つ込んで、「さび鮎の串」と強く緊めて、しかも、聲に老蒼のひゞきを見せたところ、容易くは及びうる境地では無い。

博勞の泊り定めぬ秋のかぜ柿の羽織の暮のいな

づま

こゝには馬商人がゐる。ここからかしこと村づたひ、驛場づたひに泊りあるいてゐる漂泊の、今日もそのつづきの旅路に日が暮れて、着てゐる柿色の羽織——いかにも博勞らしい——にさつと青い秋の稻妻が光りをなげてゆくのである。この異様な景色は人に或る無氣味をおもはせる。言葉がからりとして和歌史上の和歌の持つてゐるねばねばした水氣を少しも持つてゐないにかゝはらず、ゆたかな風趣をさそつて来る。中世の物の哀れが進化して、こゝまで老成して来たのである。この味に通ずるやうな歌も、俳句も、現今はまだ稀有と云つてもよい。題



材と言語もきはめて世話風であるうへに、もの言ひがすばすばとしてゐる。さうして搾取される味は言外の風趣である。芭蕉がこれを幽玄であると云つたのも尤もである。

夕月のおぼろの眉のうつくしく小柴垣より鏡磨  
よぶ

夕月のおぼろの眉をした女が、小柴垣ごしに鏡磨をよびとめるのである。こゝには中世の和歌に似た情趣がある。細み、しをりも充分である。しかし中世の和歌にはこの酒脱が無い。蘆庵、景樹などにもこれほどのくだけた物言ひが無い。たとへば西行法師の

涙ゆゑくまなき月ぞ曇りぬるあまのはらはら音  
のみ泣かれて

など和歌史上の和歌としては、よほどまでくだけた物言ひをしてゐるのであるが（いやなくだけ方である）到底小柴垣からよび込む鏡磨の酒脱味にくらぶべくも無い。また景樹の  
とにかくに露けき秋のさがならば野を分け分け  
て濡るゝまさされり

など、思ひきつて匂ひをのこして、云ひかすめた歌ひぶりをしてゐるものではあるが、さうして、餘程まで人情の幾微にも觸れてゐる作ではあるが、芭蕉などの戀の句境にくらべると、まだまだ脂が多い。もしまた大隈言道の

かきくれて降る春さめに鳴きもせず身じろぎも  
せぬ枝のうぐひす

秋の雨のさびしきけふを友もなし海苔を火にあ  
てゝ獨りこそ飲め

さくら花ちりかひくもる夕まぐれ手の舞ひ足の  
ふむところなし

など、くだけたと云へば、くだけてゐる、世話がかつてゐると云へば、云へないこともないが、矢張り一絃琴を掻いてゐるやうな、又は小學校で單音の唱歌をきかされてゐるやうな感じで、胸にすきすきと細かに豊富に這入つて、心のくまぐまを搔<sup>か</sup>るやうな味が無い。「夕月のおぼろの眉のうつくしく小柴垣より鏡磨よぶ」一語一語を見ると、従來の和歌と同じ用材であるに係



らず、その言葉のはこびにすきつとしたところがあるので、こゝで脂が脱かれてしまふ。言葉の取り廻しの妙味から来るのか、句の中の表象のうつりから来る感じの擴大(霧氣)によるのであるか、不思議な味を見せてゐる。この味は全く蕉門俳諧の絶妙な味であらうと思ふ。支考などになると、同じ蕉門でもくだけ方がずつと下品になつて来る。

古井戸に咲きかゝりたる桐の花脚絆もとらで拜

む灌佛

灌佛はすなはち佛生會である。四月八日佛の誕生日を記念する佛事である。この日、寺では花御堂をつくり、釋迦佛の像をその中に安置し、甘茶をそぐのである。それゆゑに之れを浴佛ともいふのである。旅人はいま或る寺に參詣して来るのである。そこには古井戸の趣があるのがあるのに、折しも桐の花が馥郁たるかをりをたゞよはしてゐる。くさぐさの花をもつて飾つた花御堂が——周圍には大方近邊の女子供等も群れてゐたであらう。——此の旅人の心をわけも無く誘引してしまふので、尻端折の脚絆のまゝで、禮拜するのである。その旅人の朴實な信心のほどもうかゞはれるといふのは「脚絆もとらで」といふ言葉のやゝあわたゞしい一向なほな

叙方から動いて来るのである。古井戸、桐の花、灌佛の各の表象は「うつり」の妙味を發揮して、この句をゆたかな光芒に於て延長するとともに、その延長のなかに個々の表象から来るこまかい味を散り箔のやうに浮動させるのである。一句は人事の世話にくだけてすこしの脂垢もとどめない。かういふ詩境は萬葉にも、古今集にも、新古今集にも、徳川の和歌にも見ることは出来ない。ひとり蕉門の俳諧の獨特地であるといはるべきである。

世の中は師走の末の物おまひ喰うてありく女房  
の扶持

女房の扶持……といふのは、その妻が以前大名などの乳母であつたとか、または愛妾であつたとかいふことによつて、その角かどによつて殿から扶持を賜はつてゐるのである。この男はさういふ女を妻に持つてその女房の扶持で口をすごして、仕ごともしせずに諸所をあそびあるいてゐるのである。世間は節季師走のやりくり算段で、いづれも思案に暮れてゐるのにこの男にはさういふ心配が無い。無いばかりではない。さういふ思ひやりも無いのである。「喰うてありく」の喰うてはひゞきのある言葉であり、またこの男の位を見せた言葉である。この男はふだん大き



な事ばかり言つて、あたりの人の澁面もはゞからないうるな、無神経な素ツ放六ほろくな、身なり顔つきまでも、感觸の荒い下品なところを持つてゐるのである。それが「喰うて」の語勢、語格から生み出される。まことに年のくれなどに見る市井の活ける一場面であつて、蕉門の人たちが世話俗談のうちに詩（風雅）を見出すといふのがこゝであらうと思ふ。和歌史上の歌ではこの場面はいかに苦心しても消化こなすることは出来ない。それは和歌の持つてゐる物の哀れの罪ではない。物の哀れならばこの一聯には充分にそれが餘情として残されてゐるからである。（女房の扶持で世間を漂泊してゐるこの男はそのことがすでに寂しいことである）。和歌が斯様な究屈な狭隘なものになつた事の原因は「雅」といふことの穿き違へから來てゐると見られる。雅は心のうへのことであつて、事柄の種別では無いのであるのに、そこを取りちがへてしまつたのである。今でもまだこの事の理解が行き渡らないと見えて、言葉を世話に近づけ、事柄を俗事に持つて行つた歌を見ると、これは俳諧だなど言つてゐるものがあるのだから困る。（大正十四年十二月）

## 風と躰

今流行してゐる短歌といふもの俳句といふものにも躰はある。つたない躰ではあるが、とにかく躰はある。けれども風のある歌は殆んど皆無と云つてよい。風とは言外の「けしき」である。これは技方で出るやうに思ふものもあらうが、技方で出したけしきでは本當のものではない。胸中に風色のうごくものがあつて、そのものが言葉の外に、影をつくり、雰氣をたゞよはして來るやうにならねばならない。ひと口に風躰といふ。風と躰とは共存すべきが歌、俳諧の常態であり、その意味に於て、はじめて正風藝術であるのに、今の歌、俳諧にはこの風のことは一向に解せられないで、たゞ躰だけのものとなつてゐる。躰とはその作の題材をその意向（或ひは實感）に従つて綴つただけのものである。躰だけでも歌と云はれないことは無いが、高いものとは言はれない。たとへば田安宗武の

二つなき富士の高嶺のあやしかも甲斐にありと



いふ駿河にもありといふ

この歌は、古今集の

年の内に春はきにけり一歳を去年とやいはん今年とや言はん

から來てゐるので、明らかに古今集の摸倣である。古今集のものには言葉の姿が出てゐて——上乘のものでは無いが——まだゆるさるべきものがあるが、宗武のものになると、全部が詰まらぬことを強ひてことわつて、とぼけた形にしたので、一層みにくいものにしてゐる。このとぼけたところが童心であるといふならば、童心とは卑しむべきものであらう。この歌であるがこれには躰はあるが風といふものが無い。けしきだつものが無い。宗武の傾向者である正岡子規などの歌をもつてきてこゝへあてはめて見る。果して風と稱するものがあるであらうか「瓶にさす藤の花房」などは、そのもつともよい例である。

石山の石に秋風ふきにけり

石山の石をひたふく秋の風

石山の石にいたく吹く秋の風

いづれも風は無い。たゞ意気みかへつた乾固の躰があるのみである。

石山の石より白し秋の風

躰があつて、そのうへに風がある。風は虚である。躰は實である。虚實を合してそこに初めて生命のけしき立つ理を知らなければならぬ。(大正十四年十二月)



## 潮音歌風の變遷

## その内面的要素の推移

潮音の歌風が成立しましたのは、大正十三年から十四年の間のことであらうとおもひます。この成立を來たすまでに何程の苦心が拂はれてゐるかといふことに就ては、ここに申上げるを要しないことと思ひます。十年といへば短かいもののやうに思はれますが、しかしまたずい分長い年月と云はねばなりません。達磨大師の修業を人は稱して面壁九年と云つてゐます。ただ無味素白なる壁に面して、九年の修行を積むといふことは、凡その人に出来るものではない。大師はおそらくこの素白なる壁に、種々の心の色を主觀的に描出して、それを自身に味つて、さうしてその九年といふ長年月の修行を全うしたものであらうと思ひます。芭蕉はよく心の色といふことを申されました。この心の色といふものは形無きものです。形無き色であるがゆゑに、物の世界すなはち色相世界の色よりも複雑であり、微妙であり、掬めども盡くすことの出

來ない無限なところがあるのであります。

潮音の十年間の修行は全く面壁十年のそれでありました。われわれは多くの場合、世間といふもの乃至歌壇といふものを壁のやうにして來ました。その壁が喧騒であればあることほど、われわれの心の色は深く靜かになつてまゐりました。その壁からわれわれに向つて眼が現はれ唇が現はれ、そくほ靨があらはれるやうなことがあつたとしたならば、われわれの修行は今日の心の色を見ることが出來ましたであらうか、その壁が無味であり非情であつたために、われわれはお互の胸中の風色をゆたかにすることが出來たのであります。われわれは壁を感謝しなくてはならないと思ひます。芭蕉は、門人が俳諧と世間との關係を問うた時に「ひと他人のためにする俳諧ならば容易ならん……」と答へてゐます。まことに神妙な言葉と思ひます。世間を相手、他人を相手にする歌ならば、世間次第、他人次第で、そこに満足を買つて行けます。自身に満足足らない作物であつても、世間のものが持てはやせば、その持てはやしを自分の満足として行くのです。斯ういふ満足のために、古來幾多の人々がその修行を全うせず亡びて行つたかを思ふと、芭蕉の今あげました短言は實に痛刻で骨を刺すやうにおぼえるのであります。潮音も



創刊當時三四年の間はその邊の用意にまだまだ不純なところがありました。大正八年ごろから、その覺悟がうすうすながら見え出して来たやうに思ひます。「われとわが心一つをたのみきて寂しさを知るけふにあひたり」といふ作は、多少その邊の消息を洩らしてゐるものと思ひます。この寂しさの世界が分つてまゐりましたのは、伊豆の修善寺へ靜養しに行つてゐた時であります。正月もまだ松の内の谷ふところの温泉には、ところどころに梅の蕾が見えるころでありました。綻びかゝつた梅を見て、本當に立ちゆく春の生氣を感じたのもこの時でした。人はさまざまの苦勞を積んで積みあげて来るが、最後の介錯は自然（草木）から受けるものであると思ひます。貫通するものはたゞ一つであります。それ故に花の開落にすでに人生の姿は藏せられて居ります。この事は苦勞無しでは解るものではない。さまざまの心の苦勞を積んだらうへで、初めてさういふ自然の幾微が分つて来るのであります。松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと古人が云はれたのも、天地一貫の道を知つての上のことです。初めから松は松、竹は竹といふではありません。

今の人は心の苦勞を経ずに、たゞちに自然に就かうとされる、個性とか自然とか説かれるけれども苦勞を経てゐないから、その意味に徹しない、心の苦しみを辿つて来ると、古人の言葉が一々身にふれて来る。さうして古人の道が尊くなつて来る。古人の手に引かれ乍ら歩んで行くうちに、その道が自身のものとなつて来る。道を守つてゐたものが今度は道を踏まへてゐる感じになる。眞の自由とはこゝを云ふのです。ここの味ひを今の新人といふ側の方は分らないのです。さういふ人々は十年経ても二十年経てもすこしもその心境に進歩が無い。明けてもくれても個性などと云ふことを叫んで、相變らずのところに居る。然るに古人を師とする側の人是一年毎にその進境を進めて行きます。それは古人の道は同時に眞理の大道でありますから、この眞理の威嚴と愛とが、その個人に光被するからです。ここを芭蕉は「古人の心に染まる」或ひは「師の心に染まる」といふ言葉で説いてゐます。つまり古人や師は眞理の威嚴と愛とを、恭敬の禮によつて、われわれに示してくれるので、われわれもまた恭敬の禮を以て之れに報ふるので、ここに眞理は初めてその赤心を開いて個人に臨んで來ます。眞理は神です。畏怖すべくして衰れるべきものではありません。それ故に心の貧しからざるものには眞理は面を背けません。かの道路の驕慢人が日に亡滅の道を辿つてゐる有様を御覽なさい。彼れ等は眞理の



畏怖すべきを知らないために、之れを襲してその咎めを受けて居るのです。

しかし眞理の汚濁者は、眞理をそつちのけにして自由だとか個性だとか叫んでゐる新人のみではありません。之等のものは商標が露骨であるだけに、世を傷ふことはむしろ少いのであります。商標が尤もらしく、ちよつと見には朴實な修道者らしい様子をしてゐながら、實は大逸れた心を抱いてゐる擬ひものがあります。孔子の云ふところの「郷愿は徳の賊なり」といふ側のもので、郷は地方とか田舎をいふのです。朴突を装うてゐるだけ、なかなか難物なのです。斯う云ふ側のもものが眞理を汚濁してゐるのは、古へも今も變りは無いのであります。しかし之れとて見抜かれる迄の命脈ですから、難物と云つても知れて居ります。さういふものが一度び眼がさめて、眞理の威嚴に面することが無いと限りません。われわれはさういふ周囲の種々の表はれに對して、つねに自らを戒しめて、燥狂に走せず、固屈に陥らぬやうに、さうして假りにも古人を挾んで、道を獨占するやうな心を少しなりとも持たぬやうに省みなければなりません。道を把つて進む場合は飽く迄も自らを信じ無ければならないが、併し常に道を畏れる心を忘れてはならないと思ひます。この點に於てわれわれは誠に險しい境涯を持つものであることを覺悟しなければなりません。

明治以降新短歌を唱へまして、とにかく一道を開いたと申すものは一二無いではありません、その一道と申しますものが、果して宇宙の大道を擔つてゐるものかどうかといふことで、その道の永久價値は決せられます、或ひはまだ大道を擔ふといふほどのもので無く、さらに幾次かの段階を経てはじめて大道を成就するといふ程度の支道であるかも知れませぬが、とにかく一つの時代を作つてゐます。今潮音の道をそれらの先輩者の道と比べて見て、どのやうな位置を占め得るかといふことに就て私はこゝにその事を云ふのを避けておきますが、しかし明らかに異別せられる特異な點を持つてゐるのであります。この異別せられる點が、宇宙の道の至要なものを擔つてゐるかどうかといふことで、潮音の價値の高下は裁かれるのであります。大正十三年の交に於て、わが潮音はたしかに一道を成立したと斯う云ひますれば、多くの人は眼の色を變へるかも知れませぬ。しかし此の道の深い理解者はこの言葉を怪しまないと思ひます。おそらく此の事が一般の人の理解となるのは、今後なほ十年の後かと思ふのであります、それは潮音の道はちよつと生中の心では捉へがたいところを行つてゐるからであらうと思ひま



す。應擧の鯉の細鱗の精緻さはすぐ分りますが、大雅の繪に漂うてゐる無形なものを分らせるには手間が取れるのであります。形無きところにわれわれの歌はあるのであります。「絶頂の城たのもしき若葉かな」(蕪村)と「まづたのむ椎の木もあり夏木立」(芭蕉)とは「たのもしき」と「たのむ」のところが一寸見分けがつかぬ程の類似がありますが、前者は眼の世界、後者は心の世界です。前者は景觀にとどまり、後者は誓願の域に及んでゐます。分秒の差は千里の差を持つてゐます。之れだけのことを述べて置いて、次に潮音の歌風の内容に入らうと思ひます。序言がまことに長くなつたことをおわびします。「潮音」もその初めに於ては物の印象といふやうなところに心を置いてゐます。之れを假りに寫生又寫實の要素と申しませう。以下潮音の歌風の内容となつて参りました要素を、その取り入れました順序に従つて述べようと思ひます。

### 一、寫生寫實

之はあらゆる藝術の要素となるもので特に潮音の特色とするに及ばぬものであります。西行芭蕉良寛の如き修道者の作であつても、その一面は自然界の形似を顧慮することに刻明な精神

を傾けてゐますたゞ併しその作物は寫實を局限として居りませぬ、その心はずつと高いものを表はさんがために努力してゐます。この一點が寫實作家と理想作家との境界になるので、私等が寫生作家といふのは、寫生を結局の目途としてゐるものを呼ぶのであります。或る人は云ひませう、自然界の形似はそのまゝで直ちに宇宙真理の具現であるから、その形似への顧慮は、も早や單なる寫實では無いと、斯ういふ方があるならば、それはまことに結構なことでありませう。而してこの場合はすでに宇宙の法が標準になつたので、形似のことはその法の中のものとなつてゐるのであります。こゝまで來れば寫生とか寫實とかいふやうな名目は童子を啓發する必要以外には消滅しなければなりません。古への畫家などを見ましても寫實で押し通さうとした人は、中ごろ以後になると、一通りの形似では満足しないから、種々の手を盡くして線を突つ張つたり、妙なところへ癖を盛りあげたり、筆のかすれを拵らへたりして何か畫面に怪力を添へようとしてゐます。素人はそれを見て老骨など、稱美しますが、内容は何も無い、たゞ腕の強引で行つてゐるのであります。歌よみでは平賀元義、畫家では猩々曉齋などが恰好な實例であります。潮音の初期に於ける寫實傾向はさう云ふ結局の義に於て用ゐられたのでないから